

14.5-563



1200600797805

201

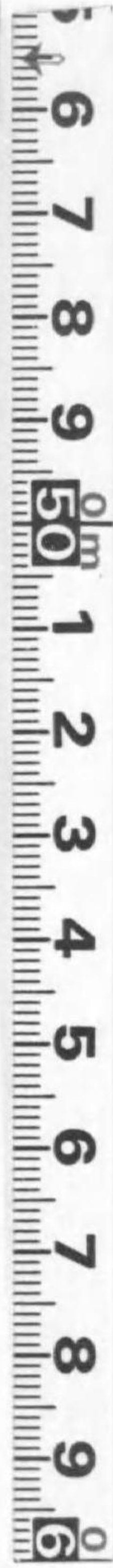
翻譯文
ソ聯極東及外蒙調查資料 第三十五編

東部シベリアの人口問題

滿鐵產業部



11.11.29



始



叢A
201

露文
翻譯
ソ聯極東及外蒙調査資料
第三十五編

東部シベリアの人口問題

滿鐵產業部

譯文
ソ聯極東及外蒙調査資料發刊の辭

ソ聯極東地方及外蒙の地は日滿兩國の隣接地として、之れが真相を究明するの必要なのは言を俟たない。嘗て當會の前身たる調査課が十餘年の日子を費し、露西亞諸官廳の各方面に對する調査研究の結果たる權威ある文獻を網羅し、之を翻譯して露亞經濟調査叢書全九十卷、約三萬頁の浩論なる資料を江湖に發表した所以も茲にある。

同叢書は其後益々我國の關心を要するに至つたソ聯極東、西比利亞、滿蒙に關して精密な知識を與ふる唯一の資料として、現に尙ほ我國各方面に多大の便宜を提供しつゝあるは周知の事實である。而も世界各地の狀勢は日に月に變化して底止する所を知らず、前著露亞經濟調査叢書の提供する知識が如何に詳細且豊富なるものにせよ、發刊以來十餘年其自然地理的部分を除き現狀と多大の懸隔を見るに至つたこと亦た已むを得ないところである。抑々露亞經濟調査叢書の原本となつた資料は主として露西亞革命前、即ち帝政露西亞時代に刊行せられたものであつたから、其純然たる自然地理的部分に於てこそ今日に於ても變化する所はないが、其文化的方面、政治經濟に關する分野に於ては根本的な改革變遷を見、最早舊日の俤を留めない状態に在る。又自然資源の方面に於てすら近年ソ聯政府の積極的な探査事業の成果として幾多の新發見があり、從來未調査の爲めに無きものと推定せられたものにして今日全然認識を改むるを要するに至つたもの一にして足らぬ。

何れの意味に於てもソ聯極東、西比利亞、蒙古は新たに見直さねばならぬこととなつた。此必要に應ずるため當



I 種
W



1200600797805

會は曩に「ソ聯極東及び西比利亞總攬」發刊の計畫を立て自然、社會各方面に亙る資料を周到に網羅し且検討を加へて之が整備に努めつゝあるのであるが、時局は益々此地方の實情を一日も速かに一般に知らしめることを要求してやまぬので飽迄巧遅主義に膠著するを容されない。乃ち時勢の要求に順應し、ソ聯極東、蒙古、新疆各方面に亙る最新の資料の略揃つたことを機會とし之を翻譯し單純な素材の儘急速之を刊行することとした。本資料が江湖の急需に應じ國家國民の進運に貢献せむことを庶幾ふ。

昭和九年八月

滿鐵經濟調査會委員長

河 本 大 作

例 言

一、本書は一九三三年「國營圖書出版部合同」より發行されたア・チュラーエフ著「東部シベリアの人口」(Историческое Восточной Сибири)を全譯したものである。

一、凡そ自然界に於ける經濟力は之を開發する勤勞民衆の存在を俟つて初めて一國又は一地方經濟の發展に資し得るものであり、従つて勞働力資源としての人口問題の研究こそは經濟建設上極めて喫緊の事に屬する。

本書はこの觀點から幾多無盡藏の天然資源を擁する東部シベリアに於ける勞働力資源の検討をなせるもので、同地方の人口數、人口の構成、人口の分布及び再分布、並にその工業分布との相對的關係を示して居り、今後に於ける東部シベリアの經濟的發達に對する人口問題の意義を考察する上に貴重なる指標と信ぜられる。

一、本書の譯者は淺田萬喜雄、新川金治郎の二調査員である。

昭和十一年十月一日

産業部資料室北方班

要 旨

一 人口問題の意義

人口問題は國民經濟上、特に計畫經濟なる條件の下に於て重大なる意義を有する。社會的に有用なるあらゆる生産に動員され得る勞働量乃至勞働資源量は人口の數及び内部的構成の變化に應じて増減し、一國或は一地方の經濟的發達に重大なる影響を與へるが故に、之が變動の研究は極めて重要である。特に計畫經濟に於ては現在及び將來の計畫の基礎を決定する諸要素の内最も重要なものとして人口に就いての正確なる計算が要求されるのである。

帝政時代の露西亞は資本主義的特性として其の生産力分布が極端に不均衡であり、歐露の四工業地方以外の全露西亞領域、就中植民地であつた東部シベリアは工業的に非常に立遅れた。人口分布も亦生産力分布に對應して甚しく不均衡であり、東部シベリアは全ソ聯邦の一六・九%の領域を有しながら其の人口は一・九%に過ぎない。かゝる不均衡且つ不合理なる人口分布及び工業分布は今に至るまで尙完全に除去されてゐない。然るに東部シベリアこそ全ソ聯邦中最も豊饒なる地方の一で、鐵、石炭、有色金属、林産物其の他の無盡藏なる原料資源に加ふるに水力資源も亦極めて豊富である。此の結果同地方は最近急激なる工業の發達を開始し、將來益々躍進せんとする趨勢にあるが、前述の如く極端に人口が稀薄なるために著しい勞働力の缺乏を來してゐる。之、人口問題が東部シベリアに

於てより一層重大なる意義を有する所以である。

二 東部シベリアの人口増加

ソウエト政権治下に於ては、新地方の開発と急速なる工業の發達とにより著しく人口増加を來せる地方が多いが、東部シベリアは漸く工業の發達を開始せるのみであるから、其の人口増加は全般的に見て未だ自然的増加の範圍を出でない状態にある。即ち一九三三年までの最近三十六年間に於ける年平均増加率は三・一%で、三百十萬人以上を算するに至つたが、右増加率はソ聯邦全體より稍々高く、従つて幾分かソ聯邦全體として有せざる社會的増加の存した事を示してゐる。

今東部シベリア人口の自然的増加を増加の特質に従つて次の三期に分つて見れば、

第一期（一八九七—一九二二年）は鐵道敷設及び之による急速なる開發時代で、年平均三%の増加があつたが、就中都市人口は著しく増加し、十五年間に二倍以上になつた。

第二期（一九二二—一九二六年）は世界大戰、内亂及び革命が相次いだ時代で、人口増加率は半減して年平均一・五%となつた。

第三期（一九二六—一九三三年）は即ち第一次五ヶ年計畫の時代で、工業の發達につれて都市人口は驚異的躍進を遂げ、一八・五%の増加を示した年もあるが、之は既成都市の人口増加と共に新都市形成にも基づくものであ

る。然るに農村人口は之と逆比例し、都市人口の著しい増加の年には却つて減少してゐるのを見る。之は自然的減少によるものにあらずして都市への人口流出乃至農村の都會化を意味するものである。

東部シベリア人口を都鄙別に見るならば、前述の理由により都市人口の比率が比較的高く、一九三一年度に於て全ソ聯邦では二〇%なるに對し、東部シベリアでは二一・三であつた。

之を地區別に見るならば農業地區は減少し、金鑛業、雲母工業其の他の工業地區及び北部交通委員會の活動の擴大並びに社會主義建設の發展によつて北部地區が著しい人口増加を示してゐる。

三 東部シベリア人口の社會的動態

一九二七年より一九三一年に至る五ヶ年間の東部シベリアの人口動態を見るに、僅か十萬人足らずの社會的増加を有したのみで、其の人口増加の大部分は自然的増加によつた事が明らかである。殊に一九三一年には五萬九千餘人の社會的減少さへ見られた。之は一見東部シベリア工業化の課題と甚だしく矛盾する如く見えるが、仔細に之を検討すれば必ずしもさうではない。即ち一九三一年を除く四ヶ年に於ては社會的増加は概ね増大を續け、特に一九三〇年度には二七年度の二倍以上になつた。且つ都市人口のみに就いて見れば事態は全く反對であつて、其の増加の八五%は社會的増加で、殊に農村人口の激減せる一九三一年度には前年度の三・五倍に増大した。

都市人口の社會的動態は前述の如く逐年急激なる増加を示してゐるが、其の増加人口構成の特質は勞働者、勤務

員が壓倒的多数を占め、且つ女子の來住者数が漸増して、一九三一年度には遂に男子数を凌駕するに至つた事である。右は流入人口の獨立生計者率高き事と女子勞働資源の著しい活動化を示してゐる。

都市への流入人口の大部分は東部シベリア内の農村地方より來り、西部シベリア、極東地方及び其の他より來たものは一五%に過ぎない。都市より流出する人口は大部分農村にあらずして他の都市へ向けられてゐる。

農村人口の社會的動態は資料貧弱なるため明確ではないが、都市人口動態統計其の他に反映された農村人口よりして、主として東部シベリアの諸都市に、次いで東部シベリア領域外へ若干流出せる事が判る。

要するに過去五ヶ年に於ける東部シベリア人口の社會的增加は極めて貧弱であつたが、第二次五ヶ年計畫に於ては既に其の第一年度に課題遂行の爲に著しい人口増補を必要とせるに鑑み、社會的增加は自然的増加に代つて第一義的意義を有する事になるであらう。

四 東部シベリア人口の自然的動態

東部シベリア人口の自然的動態に關しては正確にして且つまとまつた資料が無く、特に一九二六年の人口調査以前に於てさうであるが、今斷片的な資料を綜合して考察するに、其の人口變動の特徴に應じてこれを大體次の三期に分つて考へる事が出來よう。

世界大戰前 十九世紀中頃に於ては東部シベリア人口の出生率並びに死亡率の水準が極めて高かつた。特に死亡

率が甚しく高く、例へばイルクーツク縣の人口に就いて見ると、其の出生率の高い(一、〇〇〇人當り四三・九人)にも拘らず、自然的増加は一%にも足らない状態であつた。此の如き高度の死亡率は同地方の社會的、經濟的條件に起因せるもので容易に改善せられず、其の後僅かに低下せるのみで大戰前まで持續せられた。併し出生率が益々増大せる爲に戰前に於ては大體二%以上の自然的増加を示してゐる。

世界大戰並びに革命時代 戰爭と革命とは東部シベリア人口の自然的動態にも著しい否定的影響を與へた。即ち出生率は三〇%乃至四〇%も低下し、死亡率は約七%だけ増大し、その結果自然的増加をもたなかつた。特に都市の死亡率は極めて高く、大部分の都市は自然的減少を惹起した。革命と戰爭の終結によつて一九一八年には一時的に出生率が増大したが、翌年より國內戰爭勃發の影響を受けて再び低下し始めてゐる。

國民經濟復興期——現在 國內戰爭が終結して、破壊された國民經濟が復興し、住民の生活力が増大するに従つて出生率の増大、死亡率の減退がもたらされた。第一次五ヶ年計畫第一年度たる一九二九年に於ては出生率は一、〇〇〇人に付き四六人に達し、死亡率は一九・四人にまで低下し、其の結果自然的増加は二・六%以上に上つた。就中農村人口の出生率増大は著しかつた。然るに其の翌年再び出生率の低下、死亡率の上昇を惹起したが、之は農村に於ては住民の共營農場への移行及び之と屢々關聯して起る家族の分離、經濟状態の急激なる變化により、都市に於ては急激なる人口増加の爲衛生設備の不充分なる事により惹起されたもので、其の後共營農場の組織的、經濟的強化、コルホーズ商業の發展等により東部シベリア人口の自然的動態は漸次改善されつゝある。第二次五ヶ年計畫

に於ては労働條件、物質的生活條件の著しい改善により死亡率の低下と、出生率の上昇となり、其の結果として自然的増加の著しい増大が豫想されてゐる。即ち第二次五ヶ年計畫の第一案に於ては一九三七年度の出生率は一、〇〇〇人に付き都市三七人、農村四九人、死亡率は都市農村共に一五人と豫定されてゐる。

五 人口の社會的構成

東部シベリア人口の社會的構成に於て最も興味あり、且つ重大なる意義を有するものは國民經濟中の社會主義的部門と個人部門との消長である。

一九二六年の調査によれば全東部シベリア人口の獨立收入源を有する所謂獨立生計者（註一收入の性質の如何に拘らず獨立收入源によつて生活するものを云ふ）の中、プロレタリアートは尙一四・一%にしからず、其の中労働者七・八%、勤務員五%、失業者が一・三%を占めた。併し都市に於ては既にプロレタリアートは獨立生計者數の五六・四%に達した（其の中失業者七・七%）。之に對し不労働分子は東部シベリア全獨立生計者數の二二・二%、就中農村に於ては二・一%を占めるに過ぎず、大部分は非プロレタリア的労働民（自作農、家内・手工業者等）であつた。右プロレタリアートの中、國民經濟の生産的部門に従事する部分は僅かに三三・一%で、且つ其の中の半數は農業に従事し、工場工業に従事する部分は極めて少く、運輸業に従事するプロレタリアートの方が寧ろ農、工業よりも多かつた。

一九二六年より三一年に至る六年間の國民經濟の著しい發達に伴ひプロレタリアート——特に生産部門に於ける——は著しい増加を示し、プロレタリアート中の一時的な不労働分子たる失業者及び資本主義的不労働分子は完全に掃蕩された。即ち右期間内にプロレタリアート總數は殆んど二倍となり、就中都市に於て著しい増加を見た。

都市に於ける新労働力の需要は失業者を一掃せるのみでなく、更に非獨立生計者、就中多數の女子の生産への参加を惹起し、一九二七年より三一年に至る三年間に女子プロレタリアート數は殆んど二倍半の七萬八百人に増大した。

農村に於てもコルホーズの農業に於ける固定化、ソフホーズの形成及び其の増大等により、貧・中農が續々之に移行せるため個人部門の雇傭労働に従事せるプロレタリアートは減少せるも、總數に於てはプロレタリアートは著しく増加したのである。且つ其の質も一九二九年頃までのそれと異り一九三一年度には前述の如く殆んど全農業プロレタリアートが社會主義部門に従事してゐる。プロレタリアートの増大に反して不労働分子、就中農村ブルジョアは著しく減少し、全人口の〇・五%に過ぎぬ程になつた。

農村に於けるコルホーズ員の増加及びコルホーズ員の農業經濟の中心化は東部シベリアの農村並びに全ソ聯邦に於ける社會的進歩の中で重要な政治的收穫である。而して人口の社會的構成に於ける右の如き變化は第二次五ヶ年計畫期に其の完成を見るであらう。

六 年齢別及び性別人口構成

東部シベリア人口の年齢別構成は都市と農村とに於て兩者の社會的、經濟的相違により著しく異なる。

勞働年齢人口に就いて見れば都市に於ては全人口中六一・三%を占むるに對し、農村では五〇・五%である。之は勿論農村から都市への人口流入、特に男子勞働年齢人口の多數流入せる事によるものである。右の結果必然的に小兒及び老年人口の比率は都市に小さく、農村に大である。

ソウエト政權時代になつて以來主として死亡率減少による自然的増加上昇の結果一九二六年には一八九七年度より小兒及び青年人口（之等は革命後に生れたものである）の比率が増加し、その代り二〇歳乃至五九歳の働き盛りの年齢人口が著しく低下してゐる。こゝにも亦革命、大戦及び國內戰爭の影響を見る事が出来る。

一九二六年後は人口調査が行はれなかつた爲東部シベリア全人口の年齢構成は不明なるも、一九三一年の都市人口概算によれば都市の勞働年齢人口の比率は一九二六年の六一・三%から六三・三%に増加した。爾來都市に於ては農村よりの人口流入及び出生率の低下等により必然的に勞働年齢階級の比率増大を來してゐる。

東部シベリア人口の性別構成はソ聯邦全體のそれとは稍々異なる。即ちソ聯邦全體に於ては女子人口は男子人口を凌駕してゐるが、東部シベリアでは反對に僅少ではあるが男子人口が優越してゐる。勞働年齢人口に就いて見ても同様に男子數が多く、ソ聯邦全人口中に見る如き世界戰爭による成年以上の男子減少の結果男子勞働年齢人口の比

率女子のそれよりも小なるが如き現象は見られない。一九二六年度に於て男子勞働年齢人口は全勞働年齢人口の五〇・五%を占め、就中都市の勞働年齢人口に於ては男子數が著しく女子數を凌駕してゐる。併し女子人口の比率は逐年増加の傾向にあり、特に都市に於ては一九二二年の四六・四%より二六年には四九%に、三二年には四九・三%に増大した。之は前述の如く都市の急激なる工業の發達の結果勞働力の不足を來し、女子勞働力の著しい都市流入を導いた事による。

七 ブリヤート蒙古自治共和國

ブリヤート蒙古自治共和國の總人口は一九二六年の四十八萬餘から一九三一年には五十八萬餘に増大した。特に都市人口の比率は同共和國工業化の開始と關聯して最近特に顯著な増加を示してゐるが、未だ東部シベリアの平均水準までには到達してゐない。

ブリヤート蒙古自治共和國の主なる住民はブリヤート人及びロシア人であるが、特にブリヤート人が其の基本を爲し、總人口五十八萬餘の中二十二萬四千餘を占めてゐる。

ブリヤート人口の中、勞働者の比率は極めて低く、壓倒的多數を占めるのは農民である。其の内コルネーゾ員の全農民に對する比率は東部シベリア全體よりも高く、一九三二年度に五〇%以上に達し、富農階級は殆んど一掃された。

十九世紀に於てはブリタニア人は極めて低い人口増加を示したが、十九世紀の終り及び二十世紀の初めに於ては其の人口動態は益々悪化し、一般的に減少を呈するに至つた。尤も之が原因の一として國外への移住があつたが、主なるものは自然的減少であつた。之が爲ブリタニア民族自滅説さへ起つた程であるが、其の後ソウェイト政権に變つて以來減少は漸次増加に移行し、一九二六年乃至三一年の間に於ては年平均〇・八%の増加を示した。右増加は未だ自然的増加の比較的低い事を示すものではあるが、同時に國外への流出をも反映せる事を考慮に入れねばならぬ。之によつて從來の自然的減少は明らかに帝政時代の社會制度及び生活條件の不利等に基づける事が立證される。即ちブリタニア人口の自然的減少の原因は種々あるが、其の第一は高度の死亡率、第二は女子の妊孕率の低下で、之が遠因としては社會制度、衛生施設の不備、妊孕年齢婦人の結婚率の低さ、栄養の劣悪等が掲げうる。

ブリタニア人の經濟的、日常生活の乃至衛生的諸條件を著しく改善しつゝあるブリタニア蒙古共和國の産業發展計畫の實現は其の自然的人口増加を高めるに役立つであらう。同共和國の國家計畫委員會は一九三七年度自然的増加を人口一、〇〇〇人に付き二一人と豫定してゐる。(新川記述)

度量衡換算表

區 分	ソ聯單位	日本尺貫法	「メートル」法
距 離	一 里 一「サーヂェン」	〇・二七二六里 七・四〇九	一 軒 〇・六六八 二・一三三六
面 積	一「ヘクタール」 一「デシヤチン」	一 町 一〇〇八三 一〇一〇一六	一〇、〇〇〇平方米 一〇、九二五平方米
重 量	一「ツェントネル」 一 布 度 一「フン」	二六・六〇〇 貫 四・三六八一 貫 〇・二〇九二	一〇〇 斤 一六・三八一 斤 〇・四〇九五
容 積	一「ウ・ド・ロ」 一「フツセル」	〇・〇六八二 石 〇・一九五三 石	一 立 一〇・二九九 立 三五・二五二 立
材 積 (木材)	一 立 方 米	三・五九三七 石 二・九四八 尺	一 立 方 米

東部シベリアの人口問題

目次

要旨

第一章	人口問題の意義	一
第二章	東部シベリアの人口増加	一〇
第三章	東部シベリア人口の社會的動態	二七
第四章	東部シベリア人口の自然的動態	四〇
第五章	人口の社會的構成	五四
第六章	年齢別及び性別人口構成	八六
第七章	ブリヤート蒙古自治共和國	九六

東部シベリアの人口問題

第一章 人口問題の意義

人口、即ち一定の地域（地理的或は行政的）に住む人々の社會的集團は國民經濟的見地より見れば、特に計畫經濟の條件の下に於て重大なる意義を有し、科學的研究の對象として非常に興味あるものである。

人口の重大なる國民經濟的意義は第一に、人口がそれ無しには社會の生産力の如何なる發達も考へる事の出來ない労働資力なる事によつて決定される。何故ならば「革命階級そのものこそ最も偉大なる生産力である」（マルクス）から。而して社會的に有用なる生産に向けて動員され得る労働者数及び労働資力の總量は人口の數並びに年齢別、性別及び社會的構成に依存し、人口數及び内部的構成の變化はおのづから其の地方乃至國家の労働資力の減少又は増加を決定し、それに應じて地方の經濟的發達に影響を及ぼすのみならず又、反對に地方の經濟的發達によつても影響を受ける。

「生産計畫は數百萬の人々の活きた且つ實際的の事業である。我々の生産計畫の實現——それは新生活を創造しつゝある幾百萬の勤勞民に在る。我々のプログラムの實現——それは活動的なる人々に在る」（スターリン）。そ

してこれ等幾百萬の新生活創造者達を知らんが爲には我々は人口に就いて、その質的構成、社會的階級的成員、その中に起りつゝある進歩及び社會的再分布の方向を研究せねばならぬ。

計畫經濟は現在及び將來の計畫の基礎を決定する凡ての要素の正確なる計算を必要としてゐる。斯かる要素中の最も重要なものは人口であり、人口の總數、その動態、年齢別構成、その個々の社會的集團の人員數、領域内に於けるその分布並びに都市と農村間に於けるその配分等は國民經濟の全部門の計畫の爲の最も重要な要素である。何故かならば工業や農業にとつては消費者を考慮に入れねばならず、保健、教育の爲には之が利用人員數についての資料が必要であり、商業や配給の爲には配給を受くべき者の氏名と員數を知る事を要し、公務事業の爲には都市人口の數及び特性を知る事が必要であるから。而して、若し人口問題が或る地方又は國全體にとつて重大なる意義を有するものとするれば、ソウヴェト聯邦中最も天然資源に富める、併し乍ら現在まで工業的に立遅れてゐた地方である東部シベリアにとつてはその特殊的條件により同問題は第一義的意義を有するものであらねばならぬ。

東部シベリアに於ける人口問題の意義を理解する事は、資本主義下の露西亞に存在せる生産力分布の分析及び社會主義社會の諸條件の下に第二次五ヶ年計畫に於て描き出されるところの今後の生産力分布の分析との後に於てのみ可能である。

自然發生的且つ矛盾せる發達法則に基礎を置いた資本主義社會に於ては生産力の分布は自然發生的に資本家階級又はその個々の集團の利益を追求しつゝ發生するものであり、露西亞に於ては生産力分布がこの資本主義的特性を有せし結果、プロレタリアートは極端に不合理なる工業分布を承け續いた。此の事は次の表によつて一目瞭然である(單位千人)。

主要地域及び基本部門別によるソ聯の規格工業の配分(一九一三年の資料に據る) 註

地 方 別	礦 業	金 屬 工 業	織 維 工 業	食 料 品 工 業	其 他	計	住民一人當りの純生産額
規 格 工 業 勞 働 者 總 數	六九・八	三三・九	三九・三	三三・九	四三・六	二、五九・五	一、九・六
内 譯							
一、北西(湖畔)地方	一・〇	六・三	四九・三	三〇・三	一〇五・一	二五・七	四三・〇
二、中部工業地方(モスクワ工業地方)	六二・四	六三・三	五八・七	三三・九	三九・三	八六・四	四六・五
三、ウラル地方	一九・〇	二八・九	六・二	七・八	三三・一	二四・九	三三・三
四、南部礦業地方(ノヴォロシヤ及クリミヤ)	一八・七	五・四	二・八	二〇・三	二九・三	二七・四	四三・〇
四 地 方 小 計	四三・一	二七・七	五九・八	八二・三	二六・六	一、六六・四	五九・〇
五、其他の地方	二六・七	六〇・一	八九・五	二五・七	三〇五・〇	六〇〇・一	一一・三
其他の地方の比率(%)	三六・〇	三五・九	三三・三	七五・六	四一・四	三三・六	—
其中、後高加索、シベリア、カザーク共和國、中央アジア東部地方の比率(%)	一五・三	一〇・五	二一・八	一八・三	二二・九	三三・七	—
	二二・五	三三・〇	四〇・〇	五・五	四・四	八・六	—

(註) 共產主義大學經濟研究所「社會主義工業經濟」參照

即ち、帝政露西亞の全工業分布を見るに、規格工業に従事する労働者總數の六五・四%は四地方に集中せられ、東部地方には僅かに八・六%に相當する労働者しか存しなかつた。而して四工業地方以外の全露西亞領域——特に植民地であつた東部シベリアは工業的に發達しなかつた。併し乍ら工業發達の軌道に乗つてゐない此の地方にこそ露西亞の基本的自然資源——特に動力資源及び原料資源——が集中されてゐる。資本主義的工業分布論は先づ右の如きものである。

資本主義の露西亞に於ては東部シベリアは工業的發達をなし得なかつた。東部シベリアは帝政露西亞の植民地であり、追放徒刑の場所であつた。實にその無盡蔵の富源よりも「浮浪の徒は運命を呪ひつゝ」を歌へる徒刑の歌によつて一層有名であつた。シベリア鐵道建設問題審議の際に支配階級の代表者メシチルスキイ公爵は次の如く書いた「一のネフスキイ大通り(譯註——レニングラードの街路名)は少くとも全シベリアの五倍の價值がある」と。同時にアンドレーウイチ將軍は語つた、「シベリア鐵道は従業員や軍人や官吏にとつては望ましく、商人には便利であるが、千人の地方住民中九百九十九人までは無用であり、國家にとつては絶對的に有害である。シベリアは貧しく、收益なく、野番である」と(註)。

(註) グドシニコフ著「シベリア歴史選集」一一七頁

革命前東部シベリアに於ては石炭採掘業、火酒醸造業及び掠奪的性質を帯びた金鑛業が極くわづかに發達してゐた。この東部シベリア工業の貧弱なる發達と過去に於ける植民的状態との結果、一九三一年の終りに於てさへ總勞

働者數は四七、〇〇〇人、規格工業は一五七しか存在せず、一九三一年度に於けるこれ等企業の總生産額は一六九百萬留即ちソ聯邦の工業總生産額の〇・五%強に過ぎなかつた(註)。

(註) ヴ・ラツロフ著「第二次五年計畫に於ける東部シベリア」四一五頁(イルクーツク・一九三二年發行)

然し急激なる工業發達をなさんとする地方はそれに必要なる人口を吸収し、その結果その地方の人口を急速に増加せしめる。

而して、一地方の工業發達が貧弱なる時は原則として人口は少いものである。但し比較的稀に人口密度の大いさが工業發達の程度によつて決定されないで他の條件により決定される場合もある。

此の依存性により、住民は自ら生産力の分布に應じて國內の各地域に分布する。

資本主義露西亞に於ける不合理且つ不均衡なる生産力分布の結果、我々は個々の地方間に不均衡なる人口分布を持つに至つた。此の如き人口分布は人口移動にも拘らず現在も尙そのまゝ存続してゐる。何故ならば資本主義から繼承された工業分布は今に至るまで尙完全に除去されないのであるからである。ソ聯邦内各地方に於ける人口分布の不均衡は次の比較表により明らかである。

ソウエート聯邦の各地の人口及び領域(聯邦總計に對する百分比)

地方別	人口	領域	地方別	人口	領域
ソウエート聯邦	一〇〇・〇	一〇〇・〇	ウラル州	四・五	八・六

東部シベリアの人口問題

ウクライナ共和国	一九三三	二・一	シベリア地方	五・八	二二・九
レニングラード州	四・二	一・七	其中東部シベリア	一・九	一六・九
モスクワ州	七・六	〇・八	パシキリヤ	一・八	〇・七
極東地方	一・二	二二・七			

六

ソウエート聯邦總人口の殆んど三分の一（三一・一％）は聯邦領域の僅かに四・六％に過ぎない地域（ウクライナ、レニングラード州、モスクワ州）にあり、東部シベリアは全領土の一六・九％を占め乍ら人口は聯邦人口の一・九％に過ぎない。

尙、ソウエート聯邦の人文地理をより詳しく知るために、舊工業地方とウラル・クズネツク聯合企業地方の人口及び領域との比較を示して見よう。

一九二七年二八年度最新（ソ聯邦總計に對する百分比）

地 方 別	領 域	人 口	工業總生産額
一、舊工業地方（中部産業地方、レニングラード州、ウクライナ）	五・八	三七・一	七一・〇
二、ウラル・クズネツク聯合企業地方（ウラル、シベリア、パシキリヤ、カザクスタン）………	四二・〇	一六・九	五・三

ウラル・クズネツク聯合企業地方は舊工業地方の七倍の領域を有しながら一九二七年——二八年に於ては十四分

の一の生産額と十一分の五の人口を有するに過ぎなかつた。

生産力の不均衡なる分布、従つて不均衡なる人口分布の結果、東部シベリアは極めて低い人口密度を有してゐる。東部シベリアの人口密度は一平方秆當り一人に達せず（〇・七八）、若し人口密度を農業地方のみに就いて見るならば、人口密度は一平方秆當り〇・二人、即ち一〇平方秆當り一人となる。尙、一平方秆當り一〇人以上（都市人口を含む）の密度を有するのは全部で僅かに當地方西部の四區（ウヤルスキイ區、カンスキイ區、リビンスキイ區及びクラスノヤルスキイ區）のみで、一平方秆當り五人乃至一〇人を有するのは一五區、一人乃至五人を有するのは三二區、一人未滿のものは一六區である。而もその中一區は一平方秆當り〇・五人以下の密度を有し、東部シベリアの北部の數區は一層密度が小さい。例へばタイミル管區及びカタンダスキイ區は一平方秆當り〇・〇一人即ち百平方秆當り一人となる。而してエウ・ンキースキイ自治管區は七四二、五五〇平方秆の領域を有するにも拘らず總人口一、八〇〇人、即ち千平方秆當り九人に過ぎない。

東部シベリアの人口密度の極めて稀薄なることは諸外國の人口密度並にソウエート聯邦内の他の諸區の人口密度と比較すれば最も良く判る（次表参照）。

ソウエート聯邦の各地方及び西部ヨーロッパ諸國の名稱	領 域（單位平方秆）	一九二六年度人口	一平方秆當り人口
東 部 シ ベ リ ア 地 方	三、八九六、八四三	二、六〇三・五	〇・七（〇・六六八）

第一章 人口問題の意義

東部シベリアの人口問題

西 部 地 方	極 東 地 方	ウ ク ラ イ ナ 共 和 國	露 西 亞 共 和 國	佛 蘭 德 聯 邦	獨 逸 西 聯 邦	伊 太 利 國
一、三〇三、二〇四	七、一六八・三	一、七五七、三二九	一、九七五、九五三	二一、五二五、五七二	三〇八、九〇〇	
二、四三九、一三七	一、二九一・三	一、七五七、三二九	四五一、七三一	五五〇、九八六	四七二、〇八二	
一、七五七、三二九	六、七八七・三	一九、七五七、九五三	四五一、七三一	四〇、七四四・〇	六三、三一九・〇	
七、一六八・三	五・五	一九、七五七、九五三	四五一、七三一	四〇、七四四・〇	一三三・四	
一、二九一・三	〇・五	一九、七五七、九五三	四五一、七三一	四〇、七四四・〇	一三三・四	
六、七八七・三	三・九	一九、七五七、九五三	四五一、七三一	四〇、七四四・〇	一三三・四	
二九、〇二〇・三	六四・二	一九、七五七、九五三	四五一、七三一	四〇、七四四・〇	一三三・四	
一〇〇、八五八・〇	五・一	一九、七五七、九五三	四五一、七三一	四〇、七四四・〇	一三三・四	
一四七、〇一三・六	六・九	一九、七五七、九五三	四五一、七三一	四〇、七四四・〇	一三三・四	
四〇、七四四・〇	七三・九	一九、七五七、九五三	四五一、七三一	四〇、七四四・〇	一三三・四	
六三、三一九・〇	一三三・四	一九、七五七、九五三	四五一、七三一	四〇、七四四・〇	一三三・四	
四〇、五四八・〇	一三〇・八	一九、七五七、九五三	四五一、七三一	四〇、七四四・〇	一三三・四	

人口密度の點に於ては東部シベリアは、ヤクート自治共和國及び極東地方に次いでソ聯邦の各地方中最下位を占め、露西亞共和國のアジア部の人口密度の三分の二、歐羅巴部の十六分の一、露西亞共和國全體の十一分の二であるが、而も領域はその六分の一を占めてゐる。領域に就いて見れば東部シベリアは獨逸の八倍、伊太利の二二・五倍、佛蘭西の七倍、これ等三國の殆んど三倍の大きさを有する。斯かる廣大なる地域に居住する人口はわづか一モスクワ市の三分の一より稍々多いに過ぎない。東部シベリアの人口は先づ右の如くである。

東部シベリアの人口問題の意義は、一方に於て同地方の極端に稀薄なる人口及びそれから生ずる労働資力の缺乏により、他方に於てはソウエート聯邦中最も豊饒なる地方の一つである同地方の素晴らしい經濟的發展の見透しに

よつて決定せられる。

東部シベリア領域には非常に豊富なる原料資源が集中されてゐる。即ち莫大な金の埋藏、貴重なる樹類より成る廣大なる森林塊の存在、夥しき石炭、鐵、有色金屬及び卑金屬、其の他多くの礦物の埋藏の點に於ては東部シベリアは獨占的地位を占めてゐる。これと並んで同地方は廣大な飼料資源や農業地並びに穀物、家畜等の農業生産發展に好適な氣候條件を備へてゐる。而して此の地方の莫大なる天然富源は好都合にも種々の新形態の電力生産を可能ならしめる莫大にして安價なる水力資源と結びついて東部シベリアの經濟發展の上に非常に有利な前提を創つて居り、而も之が發達は電力生産の大中心たる強力なるアンガラ・エニセイ動力工業複合企業の創設によつて著々完成されつゝある。

第二次五ヶ年計畫期間内に於ける東部シベリア地方の經濟的發展の見透しはソ聯邦全體の社會主義建設が東部シベリアに對して持つ要求並びに同地方に特別の義務を課する特殊なる地理的狀勢によつて決定されてゐる。

第二章 東部シベリアの人口増加

一國乃至個々の地方の總人口数の増加及びその増加の性質は國民經濟の發達の過程を反映する。即ち一地方の工業發達、工業乃至農業開發の開始、鐵道の敷設等は新地區に於ては必然的に著しい人口増加を伴ふものであり、その反對に或る地方が工業的發達圏内に到達しない時にはその地方は人口の緩慢なる増加或は安定、又は往々にして減少によつて特徴づけられる。

新地方開發の歴史は極めて短期間に莫大なる人口増加の例を示してゐる。アメリカ合衆國北西部の諸地方——オハイオ、インデヤナ、イリノイ、ミシガン、ウィスコンシン及びアイオア——の人口は一八〇〇年に於ける五〇、二四〇人より一八二〇年には七九二、七一九人に、一八四〇年には二、九六七、八四〇人に増加した。即ち四〇年間に五九倍に増加したのである。

カナダの二州——アルバータ州及びサスカチュワン州の人口は一九〇一年には一六四、三〇一人であつたが、一九一一年の初めには八六六、七二七人に達し、即ち十年間に五倍以上に増加した。

ソウエト聯邦治下に於ては新地方の開發と之が急速なる工業的發達の軌道への誘引とは尙一層著しい人口増加をもたらしめてゐる。ソ聯邦に於ける急速なる人口増加の著明なる例はクズバスである。該地に於ては一九二〇年に五四、〇〇〇人の人口があつたが、一九三〇年には既に四倍即ち二二〇、〇〇〇人に増大した。而して一九三一年の

終まで、即ち一年間にクズバスの人口は殆んど倍加し、四〇〇、〇〇〇人以上に達した。

東部シベリアは漸く急速なる工業的發達を始めたばかりであり、この事實はおのづから人口増加のテンポを決定し、人口は年々緩慢に増加し、殆んど自然的増加の限内に於て増加しつつある。

因みに人口増加をより明瞭にし、その國民經濟に反映された過程をより完全に研究する爲には一九二六年に行はれた最も新しい人口調査以後の六年間に於ける人口増加のみを分析するに止まつてはならぬ。更に長期間にわたるべきである。此の目的を以て我々は一八九七年の第一回全露西亞人口調査當時並びに一九一二年に東部シベリアに居住せる住民の計算を行つた。此の計算によれば一八九七年から一九三三年迄の東部シベリアの人口増加は次の如くである。

一八九七年より一九三三年に至る東部シベリアの人口（單位千人）

總人口	一八九七年一九二二年一九二六年		一月一日		現在		計算			
	(人口調査)	(概算)	(人口調査)	(人口調査)	一九二八年	一九二九年	一九三〇年	一九三一年	一九三二年	一九三三年
(a) 都市人口	一、四六〇・三	二、一三七・七	二、六四三・三	二、七〇七・七	二、七〇七・七	二、七〇七・七	二、七〇七・七	二、七〇七・七	二、七〇七・七	二、七〇七・七
百分比	一五・六	三三・九	四〇・三	五八・四	五八・四	五八・四	五八・四	五八・四	五八・四	五八・四
(b) 農村人口	一、三〇八・六	一、七五二・八	二、三二二・七	二、三三三・〇	二、三三三・〇	二、三三三・〇	二、三三三・〇	二、三三三・〇	二、三三三・〇	二、三三三・〇
百分比	二〇・八	二六・六	一六・九	一七・六	一八・三	一八・三	一八・三	一八・三	一八・三	一八・三
百分比	八九・三	六三・四	八三・一	八二・四	八二・四	八二・四	八二・四	八二・四	八二・四	八二・四

尙、人口増加を百分比によつて示せば次の如くである。

内 人 口	増 加 百 分 比				年 平 均 増 加 百 分 比			
	八 九 七 一 年	九 二 六 年	九 三 六 年	八 九 七 一 年 一 九 三 三 年	八 九 七 一 年	九 二 六 年	九 三 六 年	八 九 七 一 年 一 九 三 三 年
總 人 口	四 五 ・ 七	三 三 ・ 三	二 九 ・ 三	三 三 ・ 三	三 ・ 〇	一 ・ 五	三 ・ 三	三 ・ 一
(a) 都 市 人 口	三 三 ・ 三	三 三 ・ 三	一 七 ・ 三	四 六 ・ 五	三 ・ 〇	九 ・ 〇	一 ・ 六	二 ・ 九
(b) 農 村 人 口	一 二 ・ 四	三 三 ・ 九	一 二 ・ 〇	一 七 ・ 七	二 ・ 四	一 ・ 四	一 ・ 四	二 ・ 二

東部シベリアの人口は緩慢ではあるが増加した。一八九七年の人口調査後三六六年間に人口は一、四六〇、二〇〇人から三、一〇八、〇〇〇人、即ち一二・八%だけ増加し、二倍以上になつた。

而してその間の平均増加率は三・一%である。ソウエト聯邦全體の人口増加は一八九七年から一九三二年の七月一日までの期間に於てはこれより非常に少く、一〇三、九三二、三〇〇人から一六二、一四三、一〇〇人即ち一五・六%だけしか増加しなかつた。その結果ソウエト聯邦領域内の總人口に對する東部シベリア人口の割合は一・四%から一・九%に増大した。ソウエト聯邦全體の人口増加に比してより急速なる東部シベリア地方の人口増加は同地方がより高い自然的増加率並びにソウエト聯邦人口の有せざる社會的增加を有する事によるものである。

尙、東部シベリアの人口増加のテンポに就いて見ると明らかに次の三期に分つ事が出来る。第一期は一八九七年より一九一二年まで、第二期は一九一二年より一九二六年まで、第三期は一九二六年から一九三三年までである。

第一期は鐵道敷設及び之による急速なる地方開發の時代である。此の結果として第一期の十五年間に人口は一、四六〇、二〇〇人から二、一二七、七〇〇人に、即ち四五・七%だけ増加し、年平均増加率は三%に達してゐる。この時期の特徴は全體の人口に比較して都市の人口がより急激に増加した事である。即ち二倍以上に増加し、一五一、五〇〇人から三五四、九〇〇人となり、一三四・二%だけ増大した譯である。この時期に於て都市人口の年平均増加率は九%に達した。農村人口の増加は緩慢で、十五年間に三五・四%、年平均二・四%であつた。

一九一二年から一九二六年までの期間は、増加が甚だしく緩慢であつた點並びに増加の性質に於て、第一期とは著しく異つてゐる。この時期は(東部シベリアの住民はその間世界戦争の餘波を受けてゐたのであるが)コルチャコフ黨及びセミヨノフ黨の恐怖を輕験し、内亂の連続と國民經濟復興の時代を経過した。此の時期に於て東部シベリアの人口は農村に於ても都市に於ても或は著しく増大し、或は急激に減少する等大きな變動を受けたのである。斯かる十五年間を経過して東部シベリアの人口増加は第一期より半減し、二、一二七、七〇〇人より二、六〇九、五〇〇人、即ち二二・三%の増加を見た。而して年平均増加率は一・五%であつた。この時期に於ては人口増加の性質も亦異つてゐた。都市人口は全體の人口と同様の速度を以て増大してゐる。即ち十五年間に二四・二%、一年間に平均一・六%の割合で増加し、農村人口はこれより僅かしか劣つてゐない。

次に第三期即ち第一次五年計畫の期間は増加の速度及び性質について見るに全體的に言つても又個々の都市について見ても以上の二期とは異り、人口は急速に増加し、この時期の六年間に同地方の人口は一九・三%、年平均三・

東部シベリアの人口問題

一四

二%増大してゐる。その内、都市人口は同時期に七一・三%、年平均一・九%、農村人口は全部で八・七%増大してゐる。最近六年間に於ける新から人口増加速度は東部シベリアの工業化開始の爲であり、それによつて急速な都市人口の増大が惹起され、農村地方に於ては往々一時的に人口減少さへ起つた。最近数年間の東部シベリア人口の増加及びその性質は、各年の人口増加を分析すれば一層明瞭となる。

東部シベリア人口の前年度に對する増加比例(%) (二月一日現在)

總 内 人 口	一九二九年對		一九三〇年對		一九三一年對		一九三二年對	
	一九二八年	一九二九年	一九二九年	一九三〇年	一九三〇年	一九三一年	一九三一年	一九三二年
農 村 人 口	一〇二・九	一〇四・一	一〇四・一	一〇四・〇	一〇四・〇	九七・〇	九八・三	
都 市 人 口	一〇五・四	一〇五・六	一〇四・六	一一三・四	一一三・四	一一八・五		
總 人 口	一〇三・三	一〇四・四	一〇四・一	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一一〇・五		

一九二八年より一九三三年に至る間の人口増加の他と異なる點は年々都市人口増加のテンポが急速になつた事であつて、このテンポは一九三二年には人口は一八・五%に達し、五——六年の内に人口は二倍に増加する事を保障してゐる。尙、都市人口の急速なる増加は——これに就いては後に説明するであらう——現在の都市の發展と新都市形成によつてもたらされたものである。

最近二年間に見られる如き農村人口の減少はソ聯邦の國民經濟内部に起つた社會的進歩及び此の進歩によつて惹

起された大規模なる人口の再分布——都市へ向つての人々の大移動——並びに東部シベリア自身の特殊性がその原因をなしてゐる。東部シベリアは極東地方及び西部シベリア地方の中間に位するが故に、大量の勞働力を要求してゐるこれ等二地方にその人口の一部を讓渡したのである。隣接地方にその人口を讓渡した東部シベリアには最近二年間は本質的には人口の社會的增加は見られなかつた。従つて東部シベリアの農村人口に大なる犠牲を拂はしめて成つた都市の増大並びに人口の東部シベリア領域外流出は農村地方人口の減少及び總人口増加の低下を導き、農村人口は一九三二年度には極めて僅かしか増加せず、一九三一年度には全然増加しなかつた。併し我々は此の事に關しては人口調査の資料によらずして、固より誤謬あるべき概算を以てせる事を考慮に入れねばならぬ。

全般的人口増加の分析を終へて都市人口及び個々の地方の人口増加の検討に移る可く、東部シベリア地方人口増加の地理的方面、即ち同地方各區の人口増加の問題を考察しよう。今東部シベリアの領域を三區——クラスノヤルスコ・カンスキイ區(舊クラスノヤルスク管區、カンスキイ管區及びトルハンスキイ地方)、イルクーツク區(舊イルクーツク管區、トルンスキイ管區及びキレンスキイ管區)及びザバイカル區(舊ザバイカル州及びブリアート蒙古自治共和國)——に分ち、人口増加の動態を見れば次の如くである。(次表参照)

各區別による東部シベリアの人口増加

區別	一八九七年人口調査		一九一二年概算		一九二六年人口調査		一九三〇年概算		對一九三〇年 年比率(%)
	人口	比率	人口	比率	人口	比率	人口	比率	
全東部シベリア	1,420,000	100.0	2,137,000	100.0	2,600,000	100.0	2,699,000	100.0	
總人口	1,420,000	100.0	2,137,000	100.0	2,600,000	100.0	2,699,000	100.0	
都市人口	151,000	100.0	334,000	100.0	421,000	100.0	511,000	100.0	
農村人口	1,269,000	100.0	1,773,000	100.0	2,179,000	100.0	2,188,000	100.0	
クラスノヤルスコ・カンスキイ區	255,000	100.0	596,000	100.0	757,000	100.0	979,000	100.0	
總人口	255,000	100.0	596,000	100.0	757,000	100.0	979,000	100.0	
都市人口	46,000	100.0	110,000	100.0	122,000	100.0	147,000	100.0	
農村人口	209,000	100.0	486,000	100.0	635,000	100.0	832,000	100.0	
イルクーツク區	377,000	100.0	749,000	100.0	969,000	100.0	1,155,000	100.0	
總人口	377,000	100.0	749,000	100.0	969,000	100.0	1,155,000	100.0	
都市人口	46,000	100.0	108,000	100.0	126,000	100.0	155,000	100.0	
農村人口	331,000	100.0	641,000	100.0	843,000	100.0	1,000,000	100.0	
全西部地方	455,000	100.0	606,000	100.0	750,000	100.0	865,000	100.0	
總人口	455,000	100.0	606,000	100.0	750,000	100.0	865,000	100.0	
都市人口	58,000	100.0	124,000	100.0	163,000	100.0	197,000	100.0	
農村人口	397,000	100.0	482,000	100.0	587,000	100.0	668,000	100.0	
ザバイカル州又ハ東部地方	78,000	100.0	234,000	100.0	311,000	100.0	386,000	100.0	
總人口	78,000	100.0	234,000	100.0	311,000	100.0	386,000	100.0	
都市人口	28,000	100.0	73,000	100.0	95,000	100.0	117,000	100.0	
農村人口	50,000	100.0	161,000	100.0	216,000	100.0	269,000	100.0	

區別	一八九七年人口調査		一九一二年概算		一九二六年人口調査		一九三〇年概算		對一九三〇年 年比率(%)
	人口	比率	人口	比率	人口	比率	人口	比率	
農村人口	659,000	100.0	1,044,000	100.0	1,280,000	100.0	1,344,000	100.0	
ザバイカル州又ハ東部地方	659,000	100.0	1,044,000	100.0	1,280,000	100.0	1,344,000	100.0	
總人口	659,000	100.0	1,044,000	100.0	1,280,000	100.0	1,344,000	100.0	
都市人口	23,000	100.0	55,000	100.0	68,000	100.0	84,000	100.0	
農村人口	636,000	100.0	989,000	100.0	1,212,000	100.0	1,260,000	100.0	

クラスノヤルスコ・カンスキイ區の人口は他の二區の二倍の増加を示してゐる。即ちイルクーツク區の一四五・六%、ザバイカル區の一七九・一%の増加に對して、三六四・九%に増加してゐる。東部シベリアの西部地方は凡て東部地方よりも人口増加が急速である。農村人口の増加に於ても我々は同様の状況を見るのである。都市人口の増加について見るにザバイカル區が第一位を占め、クラスノヤルスコ・カンスキイ區の三二〇・四%、イルクーツク區の二九七・四%に對して四一五・一%の増加である。以上の如き人口増加の結果、東部シベリアの西部地方は總人口に對する比率に於て一八九七年の五三・九%から一九三〇年には五九・〇%に増大した。因みに同時期に於て東部地方の都市人口の割合は全都市人口の二八・四%から三四・七%に増加した。

此の如く東部シベリアの植民は不均衡に行はれて居り、住民の大集團は西部地方に向つて移動しつつあり、而して未だ充分に植民されて居ないこの地方は西方より來る住民をも抑留してゐる。この事は人口密度にも反映して居り、人口密度は特にウヤルスキイ、カンスキイ、リビンスキイ、クラスノヤルスキイの四區に於て最も高い(一平

方軒當り一〇人以上)。

都市人口 前掲の一八九七年より一九三三年に至る東部シベリアの人口増加の統計表は全人口の増加の外に、一層急激な速度を以て増大しつゝある都市人口の増加をも反映してゐる。この期間に於て東部シベリアの全人口は二・二・八%の増加をなし、都市人口は一八九七年の一五二、六〇〇人から七五五、三〇〇人に、即ち四九八、五%に増加し、これによつて都市人口の割合は二倍以上に、即ち一〇・八%から二四・三%に増大してゐる。而して此處に特に注目すべきは都市人口の比率の最も顯著なる増大が最近数年間に發生せる事である。即ち一八九七年より一九一二年に至る一五年間には都市人口の比率は僅かに五・八%の増加であつたのに對し、一九三一年から一九三三年に至る僅々二年間には之と同等に五・八%の増加を見せてゐる。

東部シベリアの都市人口の比率は比較的大である。一九三一年七月一日現在に於て都市人口の比率は全ソ聯を通じて二〇%、西部シベリア地方では一四・一%、北部地方に於て二二・四%なるに對し、東部シベリアに於ては一九三二年一月一日現在二二・三%に及んでゐる。東部シベリア地方の都市人口の高い比率は同地方の工業發達の程度によつて決せられるのみでなく、その過去に於ける經濟發達の特性——當時の經濟的發達は植民地たる同地方の掠奪的搾取に向けられ、鐵道沿線(イルクーツク、クラスノヤルスク、チタ)及び北部産金地方の諸地點(ボダイボ、エニセイスク)へ住民を集中せしめた——によつて決定される。此の點に關しては東部シベリアと隣接せる、且つ同様に掠奪的搾取の行はれた極東地方が東部シベリアより一層大なる都市人口比率を有し、一九二六年の人口調査

に於て既に二七・八%に達した事がよき證左である。

我々の研究の對象となつた期間内に東部シベリアの諸都市は種々様々の運命をたどつた。或るものは著しくその人口を増加し、或るものは其の反對に減少して都市であり得なくなつた。又之と同時に新しい都市も形成された。

(次の統計表参照)

東部シベリアに於ける各都市の人口 (單位千人)

都市名	人口調査					概算					一九三三年 對一九二七年 比(%)	
	一八七七年	一九一七年	一九三〇年	一九三三年	一九三六年	一九二八年	一九二九年	一九三〇年	一九三一年	一九三二年		一九三三年
イルクーツク	五・五	六・四	一三・九	一八・九	二〇・八	二〇・八	二二・〇	二六・三	二七・七	二八・一	二八・六	二七・〇
クラスノヤルスク	三・七	七・三	六・三	五・三	三・二	七・八	八・七	九・三	九・三	二四・五	二六・八	四〇・五
チタ	二・五	四・二	—	五・〇	六・五	六・二	六・九	六・八	六・八	七・六	七・五	六〇・六
チエレムホゾオ	無シ	七・七	—	七・〇	一四・五	一四・六	一五・一	一五・七	二・五	三・五	二五・五	—
ヴェルフネウヂンスク	—	—	—	三・四	三・七	三・三	三・三	三・三	四・〇	五・八	五・五	—
エニセイスク	二・五	七・二	—	五・九	五・九	五・六	五・七	五・六	五・五	七・八	八・九	七・四
ニジネウヂンスク	五・七	八・九	—	八・五	一〇・三	一〇・五	一一・一	一一・七	一一・二	一二・五	一二・八	二七・〇
ジマ	無シ	—	—	—	八・〇	八・二	八・六	八・九	三・〇	一四・八	一四・九	—
トルン	—	—	—	—	九・〇	九・五	一〇・四	一一・三	二〇・七	二二・三	二二・八	—
スリニヂヤンカ	—	—	—	—	三・七	四・〇	五・一	五・三	六・四	八・三	八・五	—

此の表は極めて明瞭に都市形成の要因及び金鑛業の發達並びに東部シベリア北部地方の産業的並びに運輸的開發が如何に重要なを示してゐる。

農村人口 一八九七年以後東部シベリアの農村地方の人口は次の如く變化してゐる。

一八九七年	一、三〇八、六〇〇人	一九三〇年	二、三七一、一〇〇人
一九一二年	一、七七二、八〇〇人	一九三一年	二、四六六、五〇〇人
一九二六年	二、一六二、七〇〇人	一九三二年	二、三九三、三〇〇人
一九二八年	二、二二二、〇〇〇人	一九三三年	二、三五一、七〇〇人
一九二九年	二、二七六、〇〇〇人		

農村人口は餘り多く増加せず、自然的増加の範圍を出でなかつた。事實、年平均増加率は一八九七年乃至一九一二年——二・四%、一九一二年乃至一九二六年——一・四%、一九二六年乃至一九三三年——一・四%を示し、最近三六年間の年平均増加率は二・二%となつてゐる。尙、その内の二・三の年度に於ては人口増加率は勿論もつと高率に達したが、農村地方の人口増加率は寧ろ減少してゐる。これは近年に於ける例を見れば分る。一九二八年には農村人口は二・九%だけ増加し、一九二九年及び一九三〇年に於ては各四%づゝしか増加してゐない。右の如き増加率は農村地方に於て其の期間内に自然的増加が完全に維持されてゐたのみならず、東部シベリア領域外よりの流入による増加が存した事を證明してゐる。

其の後の年度に於ては反對の現象を示してゐる。一九三一年度は農村人口は七三、二〇〇人——三%だけ減少し、

一九三二年度に於ても矢張り減少を生じ、四〇、六〇〇人、一・七%の減少を示してゐる。此の結果二年間に農村人口は一三、八〇〇人の絶對的減少となつた。若し農村人口が自然的増加によつて毎年増加せるものとすれば(自然的増加率二・五%として計算すれば兩年の自然的増加は一二〇、六〇〇人)兩年の農村人口の減少数は二三四、四〇〇人に達する事となる。乍然、この農村人口数は主として急激に發達しつゝある東部シベリア地方の都市及び同地方領域外へ去つたものである。

東部シベリア農村人口減少の此の數字は誇張せるものと認める事は出来ないであらう。家畜調査の資料作成と關聯して此の問題について行はれた計算は尙一層大なる減少數字を表はしてゐる。併し乍らこれ等の全農村人口に關する資料、特に家畜を有せざる人口集團に關する資料には甚だしい計算洩れがある。

農村人口減少の分析は、その過程を考量する助けとなる資料が不完全なる爲に、極めて困難であると云ふ事を強調せねばならぬ。一九三二年の初めに行はれた家畜調査の際に於ける人口の計算洩れは既に述べたが、斯かる計算洩れは毎年行はれる租税調査の際にも生じてゐる。而して斯様なことは原則として、全農村人口数を明らかにする際に農業に従事する住民即ち農民及び農村地方に居住し工業、運輸業、木材供給準備等に従事せる住民の一部のみが把握された時に見受けられ、斯様な場合には吾々は農民の數も農村人口數も知ることが出来ない。

尙、人口の減少は農業生産に従事する住民即ち農民の減少、ソフホーズ、工業、運輸業及び木材供給準備に従事する人口數の同時的增加によつて起ることは事實であり、農村地方に於ては住民の再分布が發生する。農民は農

村地方の他の勞働に、或は都市や郊外部落へ去り、又東部シベリア領域外へも去つて行きながら減少する。これと同時に工業の發達は農村地方の諸所に人口集中を導いて、之を郊外部落と化しつゝあるが、之が爲に農村人口は減少せしめられる。前掲の東部シベリア新都市表により特に著しい農村の都市化は一九三二年及び一九三三年即ち農村地方の人口激減の年に發生せる事が判るのである。

東部シベリア諸區の人口 東部シベリアの人口増加を各區別に分析すると極めて興味深いものがある。一九二六年の人口調査後特に著しい人口増加(五〇%以上)をなせるものは、急激に發達しつゝある東部シベリア北部諸區——イガルスキイ區(六、六〇・〇%)、ウイチモ・オレクミンスキイ區、タイミル民族管區(二〇九・四%)、トファラルスキイ土民ソウエート(五〇・〇%)、乃至工業區——エニセイスク(金鑛業一〇一・三%)、スリュヂャンスキイ(雪母工業六六・七%)、チュルニセフスキイ(石炭業六一・七%)等々である。唯リビンスキイ區の人口のみが——尤もそれも最近一年間に於てのみであるが——減少した。

此の期間内には農村人口もリビンスキイ、ウソリスキイ、チュレムホフスキイの三區以外の殆んど總ての區に於て増加したが、チュレムホフスキイ區に於ては同區の工業發達と關聯して農村人口は一〇・〇%だけ減少し、その代りこれ等諸區(リビンスキイ區を除く)に於ては都市人口が著しく増大した。特に都市人口はイガルスキイ區(一三、二〇〇・〇%)——その總人口増加は特にイガルカ市の人口増加による)、エニセイスク區(二〇五・六%)及びチュルニセフスキイ區(一三五・〇%)に於て急激に増加した。

尙、一九三二年の各區に於ける人口増加を研究するとは全く異つたものが得られる。この一年間には大部分の區に於て農村地方の人口減少のため總人口は減少してゐる。特に甚だしく減少したのはバラガンスキイ(一七・四%)、ボルジンスキイ(一三・六%)、クイト。ンスキイ(一三・六%)、リビンスキイ(一三・一%)及びアクシンスキイ(一二・六%)の諸區であつて、大部分農業地方である。之と同時に都市人口は増加しつゝある。而して各區の中でも北部地方の社會主義的開發と相俟つて北方遠隔の地區は特に著しい増加を示してゐるが、これは同地方に於ける建設事業の發展、北地交通委員會の活動が擴大せる爲であり(イガルスキイ區——三九四・二%、カタンスキイ區——二二〇・〇%、ウイチモ・オレクミンスキイ區——一三三・〇%、トファラルスキイ區——二二〇・〇%)、又多くの區に於ける金鑛業の發達及び金鑛業作業の擴大によるのである(ボダイボ區——一八六・〇%、エニセイスク區——二六・四%)。尙、これら北部地方に於ては人口問題は極めて重大視されつゝある。

この等の諸區に於ては「住民の流動は工業の痛である。毎年此處から五五%に上る住民がソ聯邦の既住地へ歸つて行き、而してこれ等のより經驗を積んだ基幹部員の流出は農村より臨時的に來れる人々によつて補充される。斯かる地方は恰も人々の通り抜ける庭の様なものである。多數の人が稼ぎに來るが、稼ぐと再び立去る。可住地域から二千露里も離れた地方は全く輸入勞働力と専門家によつて維持されてゐる。この事が作業上甚だ困難なる狀勢を創つてゐる。住民の定住と地方の植民を援助すべきあらゆる激勵策こそ計畫中に含まねばならぬ」(註)。

従つて、人口問題は北部の民族管區に於ては、特に工業發達の開始と關聯して一層重要である。

(註) 括弧内の説明はレノ・ウイチムスキイ區に關するもので、一九三〇年ボダイボ市の「レンスキイ・シャフチール」新聞社發刊「レノ・ウイチムの富源及びボダイボ區發展の一般計畫案」より引用す。

第三章 東部シベリア人口の社會的動態

人口増加の二原因——社會的增加(來往住による増加)及び自然的増加(出生死亡の差増)——の内、東部シベリアに於て現今、特に第二次五ヶ年計畫の中頃及び終り頃、一層重要な意義を有するものは領域外よりの人口流入即ち社會的增加である。

従つて、人口の社會的増減の過程の分析に大なる注意を拂ふ事が必要である。併し、遺憾ながらこれ等の過程に關する資料は僅かに一部分の分析しか許さない。

東部シベリアにとつてはソ聯邦の他の諸區よりの人口流入は極めて重大なる意義を有するが、これは上述の如くその人口密度が極めて稀薄であつて、同地方の工業的發達の課題と甚だしく矛盾してゐるからである。従つて、此の人口流入の重要性は東部シベリアに於ける第二次五ヶ年計畫の見透しが論議される際鋭く強調された。

或る地方の人口増加が真にその地方並びにその國全體の生産力發達に從屬して起る時は、その歸結として、均衡なる人口分布も國內に於ける均衡なる工業分布に順應する。「唯、全國内に於ける能ふ限りの人口分布の均衡と農業生産と工業との緊密なる連繋のみが交通機關の充分なる擴張と相俟つて資本主義的生産方式の破壊の下に——これが前提となるものであるが——農村住民を一千年間も不易のまゝ育まれて來た隔離と蒙昧から救出するであら

う」(エフ・エンゲルスの住宅問題)。此の如くエンゲルスは國內に於ける人口分布の均衡を社會主義的理想實現のため缺くべからざる要件と考へた。レーニンも亦次の如き問題を提起した。「電力を遠隔の地に送る事が可能となり且つ運輸技術が発達せる曉には、國內に多少とも均衡に分布せる住民にとつて學術、技藝の寶庫を利用するに如何なる技術的障礙も存しないであらう」。

而して、斯様なソ聯邦領域内に於ける生産力の分布と關聯して、人文地理の變更即ちソ聯邦の人口稠密なる地方から、急速なる工業的發展をなしつゝある、而も人口稀薄なる地方に向けて行はれる巨大なる人口集團の移動は、第二次五ヶ年計畫に於ける重要な問題の一つとなるであらう。

資本主義的工業化の歴史は幾百萬の人口の再分布が一國と他の一國間に於てのみでなく、世界の各地間で行はれた事を示してゐる。一八七一——一九二四年間に歐洲各國から大洋を渡つて米國に移住した移民の数は三千萬人を下らなかつた。而してその内大英帝國から千二百萬人、獨逸からは三百二十萬人、伊太利から八百七十萬人、オーストリアから二百萬人、ハンガリーから百七十萬人、ポルトガルから百三十萬人、スペインから三百萬人、スカンヂナビヤ諸國から二百萬人であつた。

一八九一年より一九〇〇年に至る僅か十年間には歐洲から米國に三百七十萬人の人が移住し、一九〇一年より一九〇九年に至る九年間には七百二十萬人、而して一九〇六年のみにて歐洲からの移民は百五十萬人以上に達した。これと同時に資本主義諸國内部に於ては大規模な住民の移動が起つた。北米合衆國に於ては一九一〇年には八億八

千萬人の人が移動し、平均現地住民一人に對し九人以上の移民——旅客が鐵道によつて輸送された。獨逸に於ては一九一〇年の旅客数は十五億四千百萬人に達し、現地住民一人に付き二三人以上に當り、ベルギーに於ては一億九千七百萬、住民一人に對し四七人、露西亞に於ては一九一〇年に一億九千三百萬人、住民一人に付き旅客數一一人であつた。

資本主義的人口再分配は急激に發生した。而してこの再分配は移住民に破滅と貧苦とをもたらしつゝ、幾百萬の住民を奴隸から奴隸へと驅立てゝゐる。

「資本主義は次第に發達して中世紀の農村資本主義の狭小なる殻を脱出し、世界中の農奴政權を打破し、疾くの昔に丸裸にされ餓えてゐる農民をして富農の間に平等に分配せしめんが爲、その土地を擲つて共有となさしめ、片隅に追ひやり、多くの時間をなす事もなく過させつゝ、全露西亞を放浪せしめてゐる。小資本家團は大資本家達によつて征服されつゝあり、農民群は農業から排除されつゝあり、貧苦と失業と餓死の海が際なく擴がつて行く」(レーニン)。これと同時に工業労働者は「遠い國々」へ移住しつゝこれによつて失業からの脱出を求めてゐる。そして巨大なる自然力的乃至不可抗力的移住が行はれてゐる。蓋し「資本主義的生産の基礎に於ては労働力は常に貯藏されてゐる」(マルクス)からである。

社會主義的社會の條件の下に於てはソ聯邦各地方間の人口再分配は豫め審議せられたる計畫を基礎として組織的に行はれねばならぬ。此の人口再分配は自然發生的現象ではなく經濟的必要性の實現である。「國民經濟の計畫通

りの發達のために必要なる國內全勞働力の最大限度の利用及び地理的諸領域並びに國民經濟諸部門に於けるその正當なる分配及び再分配はソウヴェート政權の經濟政策の緊急課題とならねばならぬ」(全ソ聯邦共產黨の綱領)。

共營農場の卓越と農業生産の機械化によつてもたらされた農業勞働の生産力増大は第二次五ヶ年計畫期間内にソ聯邦内の多くの主要穀物生産地方に於て著しい勞働過剩を來すであらうが、又其の反面に於てはソ聯邦の新地方を更に集約的に發達せしめるために同地方には巨大なる人口需要が喚起されるであらう。

第二次五ヶ年計畫の全期間を通じて最も巨大なる、且つ困難にして複雑なる課題の一はソ聯邦の一地方から他の人口増加を必要とする地方への計畫的且つ組織的なる餘剩人口の移殖であらう。我々の知る如く斯かる地方の一つ、即ち第二次五ヶ年計畫の第一年度に於て既に著しい人口増補を必要とするものは東部シベリア地方である。

既に露西亞共和國の國民經濟並びに社會文化的建設發展を計畫せる第一次五ヶ年計畫はシベリアに「おびたゞしき移民の流れ」の組織化が必要なる事を指摘した。この問題はシベリア地方計畫委員會の報告に基きソ聯國家計畫委員會によつて特に明瞭に提案せられ、議決せられた(一九三〇年二月)。その中に曰く「移民問題はシベリア地方の勞働力需要の視角より、及びソ聯邦人口の重心がアジア最大の重要動力根據地に近接せる觀點より考慮せられねばならぬ」。「聯邦最大なる動力根據地のシベリアに於ける將來の發展、及び礦物資源、林産、農業資源等の大規模な工業的利用はシベリアへ向つて勞働者幹部の大規模なる移送を豫定してゐる」と。此の決議は第一次五ヶ年計畫期間中に、その比較的緩慢なる工業發達のために東部シベリアに於ては充分に適用されなかつたとするも、第二

次五ヶ年計畫期間に於ては同地方が莫大なる勞働力が必要とする急速なる工業發達の軌道に引入られた事と關係して、この決議は同地方に對しても全面的且つ完全に關係を有するものである。

東部シベリア地方全人口の社會的動態、即ち同地方領域内並びに領域外への人口流入及び流出は、重大なる意義を有するに拘らず、報告的資料が全く存在しないため、之に關して何等明示し得ないが、現在手許にある社會的動態の統計は甚だ不完全ながら同地方内のみの、且つ主として都市人口の動態に關する若干の想像を吾々に與へてゐる。人口の社會的增加は現在の總人口數の概算及び自然的増加數に關する資料よりして、概略的に述べ得られる。即ち總増加人口數と自然的増加數との差を社會的增加と看做して次の如く東部シベリア人口増加の状態を表示しうる

東部シベリア人口増加の原因 (單位千人)

(△印は減少を示す)

年 度	都 市 人 口		農 村 人 口		總 人 口	
	總増加數	内 譯	總増加數	内 譯	總増加數	内 譯
一九二七年	四一・五	六・八	四九・三	七・六	九〇・八	一四・四
一九二八年	二六・二	六・九	六三・三	八・三	九〇・六	一五・〇
一九二九年	二八・八	七・三	六八・八	五・八	九七・六	一五・〇
一九三〇年	二四・三	四・三	六五・四	三・七	八九・七	一五・一
一九三一年	七五・八	四・六	七三・三	一・三	一四九・一	一五・二

合	計	一六・五	二九・七	一六・八	三〇・六	三〇〇・〇	△ 六九・四	四七〇・一	三九・七	九七・四
---	---	------	------	------	------	-------	--------	-------	------	------

右の表には人口の社會的變動の總計即ち東部シベリア領域内並びに領域外への流入と流出の結果及び都市と農村間の内部的人口移動が反映されてゐる。併しこの表では、幾許の都市人口が農村地方人口の犠牲に於て、或は領域外より流入せる人口によつて増加したか、又農村人口は何處へ去つたか——領域内の都市へ去つたか乃至は領域外へ去つたか——と云ふ事を判斷する事は出来ない。けれども右の數字により、東部シベリアは五ヶ年間に領域外から僅かに十萬人内外の人口を受入れたのみで、その總人口増加数は主として自然的増加に依つたものなる事が明らかである。とは云へ東部シベリア人口の社會的増加は殆んど全五ヶ年間を通じて増大を続け、一九三〇年には二倍以上になつた。次いで翌年一九三二年にはこの社會的増加は急に停止し、自然的増加数の内の五九、一〇〇人が領域外に流出し、又農村人口は自然的増加を有せるにも拘らず一三〇、〇〇〇人だけ減少した。

乍然、同一九三一年には都市人口の社會的増加は一九三〇年度に對して三・五倍に増大し、七一、二〇〇人に達した。而してこの増加は五ヶ年全體を通じての都市人口の社會的増加の殆んど半ばを占めてゐる。

過去五ヶ年間にソ聯邦の他の地方より東部シベリアに流入せる人口は尠く、主としてその内部的な力、即ち自然的増加によつて人口は増大した。乍然、第二次五ヶ年計畫に於ては自然的増加は社會的増加、即ち東部シベリア領域外からの移住に地位を讓つて二次的意義を有する事となるであらう。

都市人口の社會的動態 東部シベリアに於ては過去五ヶ年間の人口の社會的増加は極めて貧弱なる地位を占めてゐるが、一方都市人口に關しては事態は全く反對であつた。一九二七年から一九三一年に至る五ヶ年間に都市人口は一九六、七〇〇人だけ増加した。其の内僅かに二九、七〇〇人、即ち一五・一%が自然的増加で、その残りは社會的増加によつて占められ、その實數は一六六、八〇〇人、即ち八四・九%に相當する。

都市人口は主として社會的増加によつて増大するが故に、この社會的増加並びにその原因たる人口移動の特質を分析する事は極めて興味あるものにして、これにより吾々は都市人口増加の地理的原因を知り、又此の増加をもたせざる社會的集團を決定することが出来る。

人口の社會的動態に關するあらゆる問題を究明する事は獨立の且つ極めて興味ある研究對象であらねばならぬ。但し本書に於ては單に根本的要因のみにはしか觸れる事が出来ない。而もこの根本的要因とても、資料を作成せる戶籍登録課の統計が不充分なるため、東部シベリアの全都市及び郊外部落に關しては、わづかに極く大なる都市についてのみ明らかにされうるに過ぎない。

乍然ソ聯邦の如何なる地方が東部シベリアに人口を送つてその都市人口の増大をもたらしたかを擧示する事は極めて興味あるものであるから、次にその資料を示して見よう。(次折表参照)

東部シベリアの都市に移住する人口は年毎に増加し、一九二八年の七三、〇七四人から一九三一年には一〇四、一九〇人に上つた事は注目し得る。而してかゝる均衡的なる増加は、イルクーツク市に於て一九三〇年度に急激な

年次	全増加數	所屬管區	地シベリア	極東地方	治ト蒙古自 共和國	東部シベ リア地方	西部シベ リア地方	累 計	其他の地方
一九二八年	100.0	四七.六	五〇.三	二二.三	一九.四	—	—	八.九	一八.二
一九二九年	100.0	四〇.〇	四六.六	二六.〇	二〇.九	—	—	八.五	一八.五
一九三〇年	100.0	三七.三	五二.八	五.〇	一四.一	—	—	六.九	二八.二
一九三一年	100.0	—	—	三.二	二.三	五.六	七.八	五.八	四.三

都市人口増加の殆んど總ては東部シベリア（ブライート蒙古自治共和國を含む）内部からの流入によるものであつて、これは一九三一年に明瞭に表れてゐる。一九三一年度は東部シベリア地方が行政上獨立せしめられた年に於て、同年度に於ては、三六、九四〇人の人口増加の内、三一、三八八人、即ち全増加の八四・九％は東部シベリア（ブライート蒙古自治共和國を含む）によつて占められ、隣接地方、即ち西部シベリア地方及び極東地方より此の年には四、〇二五人（一〇・九％）が流入し、ソ聯邦の他の諸區及び共和國よりの流入は一、五二七人、即ち四・二％にしか當らなかつた。

若し、我々が東部シベリアの凡ての都市及び郊外部落の人口の社會的動態に關する資料を有すると假定してもこの狀況は變化しないであらう。又、假に都市人口増加の原因に關して異つた狀況が得られたとしても、寧ろそれは東部シベリアの人口増加の割合を増大せしめるものとなつたであらう。これはイルクーツク、クラスノヤルスク、チタ、ウエルフネウヂンスク以外の諸都市がより人口の稀薄なる地域である事、及びその結果同地方が農村地方と

より緊密に結びついて居り、主としてそこから自己の発展のために人口を吸収してゐる事によるものである。此の如く東部シベリアの都市の人口増加は殆んど全く同地方内部の人口に依據してゐる。農村地方を去つて來た人々を併呑しつゝ大都市（上記の四都市の如き）は同地方内の小都市の人口をも亦吸収しつゝある。この事はイルクーツク市、クラスノヤルスク市、チタ市、ウエルフネウヂンスク市の全人口増加を都鄙別に分類せる次の資料によつて確認される（原住地不明のものは算入せず）。

年次	四都市の全人口増加數		内		農村地方より	
	實數	百分比	都市より	實數	百分比	
一九三〇年	三五、七七四	一〇〇	一一、三一六	三一・六	二四、四五八	六八・四
一九三一年	三八、四五五	一〇〇	四、九四〇	一二・八	三三、五一五	八七・二

都市人口の總増加數の中には、農村地方より移動せる人口が大部分を占め、特に一九三一年度にはその比率は八七・二%に増大し、その反面に於ては農村人口は著しく減少した。これ等の點より見て減少しつゝある農村人口は第一番に東部シベリアの都市に向けられ、そこに定着しつゝあるものと結論することが出来る。

尙、上記四都市の人口増加の性別構成を示せば次の如くである。（單位百分比）

都市名	年次	男子		女子		合計
		實數	百分比	實數	百分比	
イルクーツク	一九三〇年	五六・八	四三・二			一〇〇
クラスノヤルスク	一九三〇年	三五・九	六四・一			一〇〇
チタ	一九三一年	六五・六	三四・四			一〇〇
ウエルフネウヂンスク	一九三一年	五四・一	四五・九			一〇〇
四都市平均	一九三〇年	六一・一	三八・五			一〇〇
	一九三一年	五一・二	四八・八			一〇〇
	一九三〇年	四七・六	五二・四			一〇〇
	一九三一年	四六・八	五三・二			一〇〇
四都市平均	一九三〇年	五六・三	四三・七			一〇〇
	一九三一年	四九・四	五〇・六			一〇〇

四都市に於ては、一九三一年に於ける男子の比率の急激なる低下と云ふ興味ある現象が指摘される。結果に於ては都市へ流入する人口の内、女子の數は男子の數よりも僅かに多く、女子五〇・六%に對し男子四九・四%と云ふ比率になる。もしこれが一時的の現象でないならば、それは今日までの都市人口増加に於ては男子が優越すると云ふ一般的觀念を變化せしめるものである（ソ聯邦の一五都市について見るに一九二七年——二八年に於ける男子増加數一〇〇人に對し女子は七一・七人に相當してゐる）。

此の原因は農村の女子労働資源の活動化と生産への女子の参加とに求めねばならぬ。而して、之を裏づけるものとして、都市へ流入する人口の内の獨立生計者の係数及びプロレタリアート群の比率の高い點並びに比較的家婦の人數の少い點が掲げ得られる。従つて以上の理由により非自活的婦人の流入は極めて少いものと看做しうる。

因みに、一九三一年に於ける東部シベリアの都市人口増加の社會的構成は都市人口の増加とその原因の特質を示して居り、極めて興味深いものがある。(次折表参照)。

都市人口の増加は既に生産に従事してゐる者及び職業を求めつゝある労働者の流入によつてもたらされてゐる。都市の全増加人口の内、労働者は過半数を占め五八・七%、之に次ぐ最も大なる集團は勤務員で一九・〇%、次は學生で八・七%を占めてゐる。都市に流入する人口の大部分を構成するものは獨立生計者(學生をも含む)で、獨立生計者一人に對し非獨立生計者は〇・五七人に當る。而して増加人口の中に於ては獨立生計者率低く、被扶養者の率は實に〇・八三人に達してゐる(譯註——後述する如く、本書に於ては獎學金を受くる學生、其の他の如き特殊な被扶養者は獨立生計者と看做されてゐる)。

都市に來住する凡ての社會的集團は大部分農村地方より來れるものであり、只その内勤務員は大部分が他の都市より來住せるものである。乍然都市から退去する人口について見ると状態は全く反對であり、而もあらゆる社會的集團に含まれる住民(勤務員をも含む)は大部分農村にあらずして都市へ去つてゐる。

農村人口の社會的動態は特殊の興味を興へ、之が研究は極めて實際的にして、且つ根本的な意義を有するもので

一九三一年度に於ける東部シベリア都市人口増加の社会的構成 (印は減少を示す)

社会的集團別	来住者		増加		獨立生計者	
	都市より	農村地 方より なる者	都市より	農村地 方より なる者	來住者	住住者 増加
總數	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
就業労働者	800,000	800,000	800,000	800,000	800,000	800,000
1. 建設業	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
2. 金業	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
3. 金業	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
4. 不明なる者	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
5. 不明なる者	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
失業労働者	200,000	200,000	200,000	200,000	200,000	200,000
1. 建設業	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
2. 金業	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
3. 金業	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
4. 不明なる者	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
5. 不明なる者	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
1. 全労働者	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
2. 全労働者	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
3. 全労働者	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
4. 全労働者	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
5. 全労働者	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
6. 全労働者	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
7. 全労働者	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
8. 全労働者	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
9. 全労働者	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000

九、職業及び身分の不明なる者……
 八、學 生……
 七、非獨立生計者……
 六、其他の獨立生計者……
 五、自 營……
 四、コルホーズ員……
 三、家庭労働者……
 二、全労働者……
 一、失業者……

都市より
農村地
方より
なる者

都市
地方
なる者

都市より
農村地
方より
なる者

來住者
住住者
増加

郡	村	1931年	1932年	1933年	1934年	1935年	1936年	1937年	1938年	1939年	1940年	1941年	1942年	1943年	1944年	1945年	1946年	1947年	1948年	1949年	1950年	
東部シベリヤ	
	
	
	
	
	

あるが、之に關して我々は遺憾ながら極く簡單な理由——斯かる材料が一般に存在しないと云ふ——のために何等の統計をも持たない。地方移民調査局（クライトロード）に在る一九三二年の「出稼人以外の農村人口移動」に關する資料の研究は試みられたが、同資料は極端に制限せられてゐるために何等の成果も與へなかつた（東部シベリア地方の一〇區に於ける若干の村ソウエイトについては斷片的な數字が擧げられてゐる）。

上述せる農村人口數の變化と都市人口の社會的動態に關する統計に反映された農村人口とに依つて農村人口の社會的動態は略々判明したであらう。

第四章 東部シベリア人口の自然的動態

革命前に於ける東部シベリア人口の自然的動態については半端な、断片的な資料がある。舊露西亞帝國の住民移動に關する統計は僅かに歐露の五〇縣に關する資料の公表に止められてゐた。「露西亞帝國統計」中にはシベリアの二縣——トボリスク縣及びエニセイスク縣の一九〇二年の自然的動態に關する數字（一九〇七年、第十六卷）、同じく右二縣の一九〇三年の人口増減に關する資料（一九〇九年、第二十卷）及びイルクーツク縣、エニセイスク縣の一九〇四年度の人口動態に關する數字が發表されてゐる（一九一一年、第二十四卷）。以下引用する所は我々の手許に存するこれらの資料のみによるものである。

過去に於ける東部シベリア人口の自然的増減の特徴は出生率並びに特に死亡率の水準の非常に高かつた事である。「一八六六年に於けるイルクーツク縣の統計資料」に發表されたる資料を基礎として我々が爲したる計算は次の如き結果を得た。

一八六六年度に於けるイルクーツク縣人口の自然的増加出生率（人口千人當り△印は減少を示す）

正 教 徒 人 口	出 生 率	死 亡 率	自 然 的 増 加 率
都 市 人 口	四九・四	五六・三	△ 六・九

其の中イルクーツク市	農 村 人 口	總 人 口	凡ゆる宗教の全人口
四六・五	五〇・八	五〇・六	四三・九
△ 一一・三	三六・七	三九・一	三四・三
一四・一	一一・五	九・六	

都市人口の出生率は農村人口のそれよりも低い。その上死亡率に於ては農村よりも高く、イルクーツク市に就いて見ると人口一、〇〇〇人に對し五七・八人と云ふ巨大な數字に上つてゐる。かやうに死亡率が極端に高いため都市人口は自然的減少を示してゐるが、農村地方に於ては緩慢な自然的増加——一、〇〇〇人當り一四・一人の増加をもつて居り、イルクーツク縣のあらゆる宗派に屬する人々を含む總人口は出生率の高い（四三・九）のに拘らず、一ヶ年に一%にも足らぬ自然的増加しかもたない（〇・九六%）。

住民の死亡率の高いのは革命前の露西亞に於ける社會的生活條件に原因するものであり、従つてこの高い死亡率が革命（譯註、一九〇五年の第一革命を指す）前の全期間を通じて極く僅かに低下せるのみで持續されたのは偶然ではない。一九〇二年のエニセイスク縣（西部シベリアの一部を含む）に於ける死亡率は一、〇〇〇人當り三七・六人、一九〇四年には三八・五人以上にさへ上つた。一九〇四年度にはイルクーツク縣の死亡率も亦高い（三二・五人）ものであつた。此の時代に於てはこれ等二縣の死亡率は歐露の五〇縣の平均死亡率（一九〇二年度——三一・五人、一九〇四年度——二九・九人）より高かつた。然し一方では出生率も著しく高く、歐露五〇縣の平均出生率は

人口一、〇〇〇人當り一九〇二年度—一九〇四年度—四八・五人なるときエニセイスク縣に於ては同年度に夫々五八・六人、六二・一人であり、イルクーツク縣に於ては一九〇四年度に稍々低く四六・〇人であつた。高度の出生率と死亡率は戦前にも持續された。一九一一年—一三年のシベリア地方の出生率は人口一、〇〇〇人當り五二・〇人（歐露の平均四五・五人なるとき）、死亡率は三一・四人（歐露では二八・六人）で、農村地方に於ける一九一一年—一二年の出生率五四・〇に對し、都市では四三・三人であつた。

戦争と革命の數年間—其の間シベリアは男子の動員、俘虜や避難民の流入、外國の干渉と内亂、ヴルガ河沿岸地方の飢饉から逃れ來た避難民の波等を経験した—は人口の自然的増減にも大きい影響を與へた。勿論それは否定的なる影響であり、出生率は減少し、死亡率は急激に増大した。

然し、遺憾ながらこの時期に於ける人口學的資料はなく、又他日之を得る事も恐らく無いであらうから、當時の自然的人口動態を推察するには只現存の限定された断片的な資料によるの他はない。

戦争と革命の時代は非常に死亡率の高い時代であつた。特に都市人口の死亡率が高かつた。一九二〇—二二年には東部シベリアの大部分の都市の人口は自然的減少の一途を辿つた。この事はイルクーツク市に關する資料によつて明瞭に説明せられる。

イルクーツク市人口の出生率と死亡率（人口千人當り △印は減少を示す）

出生率	死亡率	自然的増加
一九一二年 三四・八	二六・〇	八・八
一九二〇年 三〇・三	三三・三	△〇・三
一九二一年 三三・三	四四・〇	△一一・八
一九二二年 二四・七	四三・七	△一九・〇
一九二三年 三一・四	二二・〇	八・四

一九二〇—二二年に於てイルクーツク市にとつて特徴的な事はコルチャク黨の亂及び國內戦争の結果死亡率が極めて高かつた事である。一九二二年には人口一、〇〇〇人當り死亡數は四四・〇人に達し、一九二二年には極めて僅かしか死亡率は減少してゐない。これと並行して出生率の急激な減退が發生し、特に一九二二年度に於て甚だしかつた（懷胎年度たる一九二一年の情勢の影響による）。

これ等の事實は凡て人口の自然的増加の急激な低下を導き、一九二二年度には一、〇〇〇人當り二七・八人即ち一九二二年度の自然的増加の三倍以上減少し、人口一、〇〇〇人當り一九・〇人の自然的減少となつた。

尙、イルクーツク市人口の自然的動態は唯大都市にとつてのみ特徴的なものと看做す事が出来る。何故ならば一例を挙げれば舊イルクーツク縣の他の凡ての都市は一九二二年には自然増加を有し、農村地方の人口も亦出生數が死亡數を凌駕してゐるからである。

帝國主義戦争への男子の動員及び其の後東部シベリアの全領域に擴大せる國內戦争は出生數の急激な減少を誘發

今戦前最後の三ヶ年間の平均出生率を100とすれば、戦争及び革命の年度に於ける出生率の低下は次の如くである。

一九一四—二〇年間の出生率の低下(概算) (註)

懐胎年度	出生年度	イルクーツク縣		エニセイスク縣	
		縣全體	其中イルクーツク郡	縣全體	内
		カンスク郡		エニセイス郡	
		クラスノヤ		ルスク郡	
一九一三—一九一四	一九一四—一九一五	100	100	100	100
一九一四—一九一五	一九一五—一九一六	91	88	82	85
一九一五—一九一六	一九一六—一九一七	74	72	65	74
一九一六—一九一七	一九一七—一九一八	68	65	62	71
一九一七—一九一八	一九一八—一九一九	84	77	80	90
一九一八—一九一九	一九一九—一九二〇	80	69	81	87
一九一九—一九二〇	一九二〇—一九二一	75	73	66	74

(註) ドミトリー・メルハーレフ著「大戦及び革命時に於けるシベリアの出生率」(シベリアに關する統計集)

帝國主義戦争は出生率を三〇乃至四〇%減少せしめてゐる。革命と戦争の終焉は一九一八年度に於て若干の出生率増加をもたらした。併しながら既に一九一九年からは國內戦争勃發の影響を受けて出生率は再び低下し始めた。

概算を基礎とせる出生率も亦斯かる出生率減退の状況を示してゐる。

エニセイスク縣の出生率 (人口千人當り)

一九二一—一九二四年	一九二八年	四六
一九二二—一九二四年	一九二九年	四六
一九二五—一九二六年	一九三〇年	三八
一九二六—一九二七年	一九三一年	三六

大戦及び革命時代に於ける出生率の減退は「出生による人口の増加」を著しく縮少せしめ、ドミトリー・メルハーレフ氏の概算に據れば、東部シベリア西部に於ける出生豫定数の減少は次の如くである。

出生率低下による人口減少

縣名	一九二〇年度人口調査による人口	一九一五年—一九一六年の出生數	出生豫定數	出生率低下に依る人口減少	
				實數	總人口に對する百分比
イルクーツク縣	四二八、〇〇〇	一一六、三七八	一四八、〇五〇	三一、六七二	七・四%
エニセイスク縣(西部シベリアの二部を含む)	一、〇三四、〇〇〇	二五八、三八三	三五四、七三二	九六、三四九	九・四%

尙、エニセイスク縣に關する資料の中には現今西部シベリアに包含されてゐる最も人口稠密なるミヌシンスキイ郡が加へられてゐる事及びメルハーレフ氏によつて述べられたる「東方に進むにつれて出生率低下が少くなる」と

云ふ傾向を考慮に入れて「死産」による人口の減少率を全人口の七・五——八%と定める事が東部シベリア全體として一層正しい事と思ふ。

其の後一九二〇——二二年には全シベリアの人口は、死亡率高く、出生率低いため自然的増加を示さなかつた。尙バビニン氏の計算によれば此の年に於ける人口の自然的動態は次の如くである。(註)

(註) バビニン著「一九二六——一九四一年の露西亞共和國諸地方の都市及び農村人口」共和國々家計畫委員會報一九二七年十一月、十二號。

一九二〇年——二二年度の人口の自然的動態 (人口千人當り)

地方別	出生率	死亡率	自然的増加
全露西亞共和國	三三・一	三四・八	二・七
露西亞共和國歐羅巴部	三一・九	三五・一	三・二
シベリア	三三・五	三三・五	〇

全シベリアの人口の自然的動態は露西亞共和國全體のそれよりも、特にその歐羅巴部のそれよりも良好であつた。即ち死亡率はより低く、出生率はより高く、此の結果、露西亞共和國の人口は減少せるにも拘らず、シベリアの人口は増加もしなかつたけれど減少もしなかつた。

正常なる状態への移行及び國內戦争の終焉は直ちに人口の自然的動態に好影響を與へた。破壊された國民經濟の

復興、勤勞者による十月革命の成就等々は自然的増加を著しく助長せしめる——出生率を高め死亡率を減少する事によつて——に充分であつた。

一九二三年——二四年度の人口の自然的動態 (人口千人當り)

地方名	年次	出生率	死亡率	自然的増加
露西亞共和國の五十一縣	一九二三年	四二・二	二二・九	一九・三
エニセイスク縣	一九二三年	四六・〇	二七・四	一八・六
イルクーツク縣	一九二三年	四二・六	二三・四	一九・二
露西亞共和國歐羅巴部	一九二四年	四三・六	二四・〇	一九・五
ザバイカル縣	一九二四年	四六・二	二三・三	二二・九

露西亞共和國の人口は一九二〇——二二年の自然的減少から、既に一九二三年には一九・三と云ふ著しい自然的増加に移行してゐる。而して一九二四年に於ては露西亞共和國の歐羅巴部分に就いて見るに人口一、〇〇〇人當り一九・五人の増加である。死亡率は三五・一人から二三・四に減少、出生率は三一・九人から四二・二人に増加してゐる。斯から過程はシベリアにも起つて居り、出生率は急激に増加して、一九二〇——二二年には全シベリアに於ては一、〇〇〇人當り三三・五人、一九二三年にはエニセイスク縣に於ては四六・〇人、イルクーツク縣——四二・六人となつてゐる。更に一九二四年にザバイカル縣は人口一、〇〇〇人當り四六・二人の出生率を示したが、個々の

郡は一層出生率高く、ネルチンスキイ郡—五一・九人、スレテンスキイ郡は五一・三人であつた。死亡率は著しく減少し、イルクーツク縣について見れば、一九二三年度は人口一、〇〇〇人當り二三・四人に、ザバイカル縣では一九二四年度に二三・三人に減少してゐるが、ザバイカル州のベトロ・ザヴナドスキイ郡に於ては一六・二人にまで減少してゐる。尙、これ等の年に於けるシベリア人口の死亡率は露西亞共和國に於けるよりも若干高い水準に在る。

其の後色々行はれてゐる政策の影響を受け、多數住民の生活條件が改善された爲に益々出生による人口増加は誘發されつゝある。

一九二五年—二七年の自然的人口増加

地 方 名	年 次	都 市 人 口		農 村 人 口	
		出生率	死亡率	出生率	死亡率
露西亞共和國歐羅巴部	一九二五年	三六・一	一八・九	一七・二	二六・五
” ”	一九二六年	三四・六	一七・八	一六・八	二二・二
” ”	一九二七年	三三・一	一八・三	一四・八	二三・三
タラスノヤルスキイ管區	一九二五年	三六・五	二二・九	一四・六	二三・五
” ”	一九二六年	三五・一	二四・八	一〇・三	二九・五
” ”	一九二七年	三三・九	二二・〇	一二・九	二三・八

地 方 名	年 次	都 市 人 口		農 村 人 口	
		出生率	死亡率	出生率	死亡率
カンスキイ管區	一九二五年	三八・〇	二八・一	九・九	四九・三
” ”	一九二六年	四一・九	三〇・九	一一・〇	五四・五
” ”	一九二七年	三七・二	二二・二	一六・〇	二五・〇
イルクーツク縣	一九二五年	三九・五	二四・〇	一五・五	三九・四
” ”	一九二六年	三五・〇	二四・〇	一〇・四	四三・八
” ”	一九二七年	三四・二	二二・〇	一三・二	四六・四

露西亞共和國歐羅巴部に於ては農村の人口出生率が減退してゐるのに拘らず、東部シベリアの農村地方に於ては著しく増大してゐる事は注目に値する。乍然、東部シベリアの都市に於ける人口出生率は露西亞共和國歐羅巴部と同様減少して居り、更に農村人口の死亡率に就いて見れば、東部シベリアは一般的に歐羅巴部と同一水準にあり、都市人口の死亡率は漸次減少してゐるけれども、尙、歐羅巴部より遙かに高い。

第一次五ヶ年計畫施行前の數年間に於ける東部シベリアの人口の自然的動態の検討を終へんとするに當つて尙一つ述べねばならぬ事がある。それはシベリア住民の妊娠程度に就いてである。

ソ聯邦の各地方人口の妊娠程度を比較すればシベリア人口は露西亞共和國の平均よりも、或はソ聯邦歐羅巴部の平均よりも多産的である事が判る。この事は次の表により明らかである。

地 方 名	一五—四九歳の婦人千人當り出産數		
	全 人 口	都 市 人 口	農 村 人 口
ソ 聯 邦 歐 羅 巴 部	一六三・七	一三三・三	一七六・八
露 西 亞 共 和 國	一六九・六	一六・七	一八三・一
露 西 亞 共 和 國 歐 羅 巴 部	一六五・四	一一五・一	一七八・七
シ べ リ ア 地 方	二二一・七	一四一・五	二二三・五

より多産的なのは早婚が多いからである。露西亞共和國歐羅巴部に於ては一九二六年度に結婚せる全農村婦人の内一九才及びそれ以下の夫人が三五・二四%を占めたが、シベリア地方に於ては六三・〇九%を占めてゐた。同年齡の男子に就いて見れば露西亞共和國歐羅巴部と東部シベリアには夫々二二・三二%及び三七・二六%の割合となる。以上、我々は東部シベリアの各部分乃至全體に關する資料を検討し來つた。勿論、右の資料は東部シベリアの人口の自然的動態を完全に説明するものではない。而も、我々は意識的に東部シベリア人口に就いての計算を試みなかつたが、それは不可能の事だつたからである。と云ふのは、戦前及び戦時並びに革命當時に必要な資料が消失せるため、又一九二三年より一九二六年に至る間にあつて人口の自動的動態の近似數を推定するに足る正確なる東部シベリアの總人口數を決定する事が不可能だつたがためである。又、一九二〇年の人口調査はザバイカル州に於

ては國內戦争のために之が行はれなかつたと云ふ事も考慮に入れねばならぬ。従つて東部シベリアの人口に關する限り一九二六年度の人口調査の資料のみが自然的動態を知る上の確固たる根據となつてゐるに過ぎない。最近の東部シベリアに於ける人口の自然的動態は次表の如くである。

一九二七年—三一年の東部シベリアの自然的人口動態 (人口千人當り)

出 生 率	一九二七年					一九二八年					一九二九年					一九三〇年					一九三一年				
	全 人 口	都 市 人 口	農 村 人 口	全 人 口	都 市 人 口	農 村 人 口	全 人 口	都 市 人 口	農 村 人 口	全 人 口	都 市 人 口	農 村 人 口	全 人 口	都 市 人 口	農 村 人 口	全 人 口	都 市 人 口	農 村 人 口	全 人 口	都 市 人 口	農 村 人 口				
出生率	三四・八	三五・六	三三・一	二七・一	三一・三	四六・九	四六・七	三九・六	三九・六	四四・七	四五・八	四六・〇	四三・一	三七・七	二〇・三	二一・七	一八・三	二〇・九	二二・八	一九・九	二二・八	二二・八			
死亡率	四六・九	四八・一	四九・一	四六・七	四六・七	四四・七	四五・八	四六・〇	四三・一	二〇・五	二〇・五	一九・四	二一・六	一七・七	二〇・五	二〇・五	一九・六	二一・八	一九・九	二〇・九	二〇・九				
自然的増加	一四・五	一三・三	一三・八	六・二	七・五	二六・四	二六・一	二九・五	二四・九	二四・二	二六・八	二六・六	二一・五	二〇・〇	二四・二	二六・四	二六・一	二九・五	二四・九	二四・九	二四・九				

乍然、東部シベリアの人口数に關する吾々の知識は不正確であるため、人口の自然的増減を示す比率の内容に就いて一言して置かねばならぬ。即ち、人口数の算定に際して行はれる僅少の端數切捨は忽ち自然的人口動態の係數に反映して係數を著しく引上げ、そのため我々は各區別による「自然的」人口動態の分析を拒否せねばならなかつた。何故ならば東部シベリアの個々の區に於ける人口数は極めて條件的であり、而も各區によつては戸籍簿に缺陷のある所さへ見受けられるからである。従つて地方産業統計局によつて發表されたる人口の自然的動態の各區別數字には大なる疑問がある。(註)

(註) 東部シベリア地方に關する「經濟統計便覽(一九三三年イルクーツク出版)による

表に明らかなる如く、都市と同様農村人口の出生率も一九二七—二九年の増大後は低下し始めてゐる。特に農村人口に於ては甚だしい。農村地方から都市へおびたゞしく住民の移住せること及び公共住宅建設が稍々後れてゐるにも拘らず都市人口が著しく増加せること等は出生率強化に好ましからざる情勢を招來せざるを得なかつた。これと同時に、農民大衆の大部分の共營農場への移行及びこれと屢々關聯して起る家族の分離及び經濟狀態の急激なる變化等は必然的に出生を一時的に中止せしむるに至つた。乍然、共營農場の特權の強化、共營農場の組織的經濟的強化、近き將來に於けるコルホーズ商業の發展等は農村人口の出生率増大を導くであらう。

東部シベリアの住民の死亡率は一九三〇年度に於ける若干の上昇以後は一般的に低下を續けてゐる。特に一九三一年には急激に減少して、全五ヶ年間の最小限度の水準——人口一、〇〇〇人當り一七・七人に達した。都市に於て

はその急速なる人口増加のため、衛生設備の改善が人口増加に併行して行はれず、死亡率は多少高くなつてゐる。而も、東部シベリアの都市住民の死亡率上昇は主として同地方の諸區並びに同地方領域外より來れる没落分子によつてもたらされてゐる。

第二次五ヶ年計畫は社會主義建設の時代であらう。階級打破、搾取一掃、社會主義的勞働條件及び生活條件の強化・擴大及び勤勞者の物質的生活條件の改善等により、第二次五ヶ年計畫期間内には人口は激増し、第一に死亡率減少と出生率増大を呼び起し、その結果として人口の自然的増加は著しく助長されるであらう。

だが、この過程を數字で表す事は困難である。特に一九三一年及び一九三二年の人口の自然的増加に關する資料を有しないでは。第二次五ヶ年計畫の第一案に於ては一九三七年の都市住民の出生率は人口一、〇〇〇人當り三・七〇人と豫定され、農村住民の出生率は一九二九年の水率に、即ち一、〇〇〇人當り四九・〇人と豫定された。農村地方の現在の死亡率は都市よりも比較的大きいが、第二次五ヶ年計畫末にはより強度の死亡率減少がもたらされるであらう。そして都市と農村間の死亡率の差は著しく短縮され、兩者の死亡率は同水準——大體人口一、〇〇〇人當り約一五・〇人になり、又都市人口の自然的増加は一九三七年には二二・〇人、農村では三四・〇人となるであらう。

第五章 人口の社會的構成

一國全體の人口又は其の中の個々の地方の人口を研究するに當つて中心問題となるものは其の社會的構成及び階級的構成である。既にマルクスも云つてゐる、「人口はもしそれを構成する所の階級を考慮に入れないならば概念に過ぎぬ」と。(註)

(註) 一九二八年ジノビエフ共産大學出版、マルクス著「經濟學批判入門」二〇頁

現代に於て人口の社會的構成を研究する事は特に重要な事である。何となれば先づ第一に、社會的構成は國民經濟生活の内部に起りつゝある進歩の影響を受けてその進歩の成果を反映しつゝ年と共に變化しつゝあるためである。第二に人口の社會的構成の内部に起りつゝある過程を知り、その動向を確めたる時に於てのみ國民經濟の向後の發展の道を正しく企劃する事が出来るからである。

帝政露西亞の統計は、支配階級の政策を反映して、人口の社會的構成問題を巧妙にほかし去つた。舊露西亞帝國の人口に關する國家統計は表面的には階級闘争の存在を否定して、信教、身分、職業等を取扱ひ、而もその職業を雇傭労働と雇傭労働者搾取とに分つてゐない。

東部シベリアの人口構成に關する革命前の公式資料を見るに、雇傭労働者數に關する資料を發見する事が出来なない代りに、「偶像崇拜者」の正確なる計算等々を知ることが出来る。

乍然、革命前に於ける東部シベリア人口の階級別構成を決定する事は極めて興味深いものである。此の問題に詳細なる解答を與へるには専門的研究に俟つ他はないが、本書に於て帝政時代の東部シベリアの階級を同時代の統計の歪める鏡面に映れるまゝに示す事は可能であり、且つ必要なりと思ふ。

或る身分を有すると云ふ事は必ずしもある階級に屬すると云ふことを示すものではない。何故かならば、身分と階級と云ふものは異つた概念を有するものだからである。乍然、身分に従つて人口を分類する事は尙且つ何等かの特質を示すものであり、特に革命前の諸條件、或は人口の大集團の内容を知る上に必要である。

帝政時代の東部シベリア人口身分別分類 (註) (人口千人當り)

縣	名	官族及史	僧侶	名譽公民及商人	平民	百姓	雇農夫	異民族	其の他
イルクーツク	イ	一五	五	五	七四	六〇〇	一〇	二二五	六六
エニセイスク	エ	九	四	三	七二	七五八	一三	八四	五七
ザバイカール	ザ	一〇	三	四	三九	三五六	二九一	二七四	二二
露帝國全體	露	一五	五	五	一〇七	七七一	二二	六六	八

(註) 内務省中央統計委員會出版「一九二二年度露西亞統計年鑑」一九二三年セントペテルブルク發行

東部シベリアの中心イルクーツク縣を特徴づけるものは上流階級——貴族、僧侶、商人及び名譽公民の比率が比較的大的な事である。而してその比率は他縣より小であるが、その數は露西亞帝國の平均と同水準にある。これは

住民中に於ける官僚と商人階級の優越及び露西亞帝國植民地を支配せる貴族と僧侶並びに異民族や隣國と通商せる商人のおびたゞしい數が舊イルクーツク縣に集中されてゐた事を物語つてゐる。

次に、一般に雇傭労働に従事し、又は小なる家内工業や小商業に従事せる平民の比率が帝國の平均に比して小なる事に氣づくであらう。主に農業に従事する百姓、傭農夫及び異民族の比率の大なる事は工業發達の貧弱なる事を物語つてゐる。而してイルクーツク縣は他縣より平民の多い事も顯著なる事であるが、これで見ると同縣には比較的多數の雇傭労働者、小手工業労働者が集中されてゐたに違ひない(イルクーツク・チェレムホーヴ、ボダイボ等)。尙、右の革命前の東部シベリア人口構成に關する統計の他に、一八九七年の人口調査の結果作成されたところの職業別による人口分類表があるが、此の資料には雇傭労働者と雇傭労働を利用する自營業者の分類を示してゐないため、全く無價値と云つて良い。即ち、此の職業別分類は主に何處に誰が働いてゐるか云ふ點に就いて、即ち商業、運輸業、或は工業と云ふ風に従業個所に従つて行はれたものであつて、工場主、商店主、乃至は労働者として働く者、番頭として働く者の區別を示してゐないのである。従つて社會的人口構成を分析するためには此の資料は極めて限定された範圍内に於てのみ利用されるに過ぎない。乍然此の資料が何等かを表示するものなる事は疑ひない所であり、従つて之を引用する事も無益ではないであらうから、次に表示して見よう。

一八九七年人口調査による東部シベリアの職業別人口構成 (人口千人當り)

縣名	公務		軍人	神官		使用人	農業		工業		交通	商業	その他
	自由業	公務		神職	農		漁	手	工				
エニセイ	一四	一〇	六	四	五二	一九	七二七	一一八	一九	二九	二二		
ザバイカ	一九	一〇	一	四	二八	一四	八三四	六四	九	一九	七		
イルクーツク	一四	一四	一四	五	五五	二五	七二九	九六	一六	三三	九		
歐露五〇縣平均	一四	一四	八	七	四二	一九	七四九	九七	一七	三七	一〇		
露帝國平均	一四	一〇	一〇	六	四六	一八	七四六	九六	一六	三八	一〇		

住民の職業の内、農業部門が優位を占め七・二——八〇%に達してゐる。而して、イルクーツク縣に於てはザバイカル縣に於けるよりも農業に従事する者がかなり少い。イルクーツク縣は經濟的に一層進歩してゐる様に思はれる。同縣住民の職業の中で大なる比率を有するものは加工工業、鑛山業、手工業及び商業であり、同縣に於ては官僚階級が他縣よりもより大であり、歐露の諸縣よりは約二%、全帝國の平均よりも更に高い。

其の後革命に至る迄の國民經濟の發達、戦争、並びに特に革命により人口の社會的構成は著しく變化せしめられ、其の後に於ても一再ならず變化した。先づ東部シベリアの植民地的搾取及び新來住者のおびたゞしい流入の影響を受け、次いで戦争により、終に革命によつて人口の社會的構成は破壊され、コルチャク黨の亂、國內戦争、治安回

復の時代を経て最後に國民經濟再建の時代を経過した。これ等の各段階は國民經濟内部に發生せる過程の特徴に應じて人口の社會的構成を改變し、而も住民の社會的構成に大きい變化を與へた。

然し、遺憾ながら吾々の手許にある統計中には此の時代に於ける社會的構成を示すに足る資料は存在しない。特に東部シベリアに關する資料は一九二〇年に行はれた此の時代に於ける唯一の總人口調査さへも東部シベリア（ザバイカル縣を除く）の極く小部分のみに行はれて居るに過ぎず、極めて不完全である。只、東部シベリアの全人口の質的構成を判斷するに足る最初の信憑すべき根據となつてゐるは一九二六年の人口調査資料である。我々は人口の社會的構成の基礎的な輪廓のみを示す事を目的として、此の人口調査資料の分析に移る事としよう。

一九二六年の人口調査後既に六年以上も過ぎた。乍然、その資料の分析は現今に於ても尙必要である。何故ならば、之が分析は一九二六年の人口調査資料と現在の人口構成を比較對照して、此の期間に於ける社會的進歩を決定し、その進歩の方向を考究し、その進歩の深度を明らかならしむるものだからである。加之、人口調査は東部シベリアの國民經濟に對する我々の知識の極めて重要な段階たるものであるから、最近の人口調査資料を明確にする事は決して時期を失したものと云へないであらう。否、東部シベリアに關しては現在に至るまで未だ人口調査資料の分析は行はれてゐない以上は、之が檢討こそ必要であらう。

先づ第一に人口の質的構成を示す最も一般的な指標たる獨立生計者に就いて述べよう。

社會統計に謂ふ所の獨立生計者とは非獨立生計者と異り、その性質の如何に拘らず獨立收入源によつて生活する者を言ふ。こゝに於て、我々は忽ち若干の曖昧さと時代錯誤とに打つかるのである。社會統計に於ける獨立生計者なる概念は、獨立生計者の得る收入の性質如何は問題とせず、不勞所得によつて生活する商人も、賃銀を生活源泉とする勞働者をも包括してゐる。之と同時に獨立生計者中には社會的生產に参加せざる大なる住民層が含まれる。例へば獎學金を受ける學生、扶助料を受ける失業者及び國家の被扶養者、恩給受領者並びに癡疾者等の如き所謂不勞生計者が含まれてゐる。且つ獨立生計者なる概念は收入取得の形式を主とし、本質的には同種の人口集團を區別してゐる。例へば學生に就いて見れば、獎學金を受けてゐる學生のみを獨立生計者と看做せる如きである。その上獨立生計者と非獨立生計者の分類は農民に於ては明確ではない。それはその大部分が家長又は仕事の手傳をなす家族より成る、社會的に不鮮明なる集團を爲すからである。これ等の事實が凡て獨立生計者なる概念を陳腐な曖昧なものとしてゐる。

乍然、獨立生計者率は住民の勞働力及び社會的生產に参加する割合を示す指標として注意される可きである。尙、右に述べた如き獨立生計者なる概念の不完全さは研究者に對して單にその外面的分析のみに止らず、尙深くその内容を解剖する事を要求してゐる。

一九二六年の人口調査に示された東部シベリア人口の獨立生計者数は次表の如くである。

一九二六年度東部シベリア獨立生計者（單位千人）

住民の種類	都市人口		農村人口		總人口	
	總數	獨立生計者實數	總數	獨立生計者實數	總數	獨立生計者實數
總人口	四〇・九	一七・五	二・四〇〇	一、四四五	二、六〇・九	一、四四三・〇
內譯						
一、勞働者	一四一・一	四五・二	二九・六	六七・七	二〇〇・七	一一三・八
二、勤務員	三三・三	五・九	五・三	二・五	四〇・七	一八・六
三、自由職業者	一・九	〇・八	二・六	一・〇	四・五	一・八
四、雇傭労働者を有する營業主	五・一	一・七	四・九	一・八	一〇・〇	三・三
五、雇傭労働者を有せざる營業主	二八・九	九・九	九・六	二・四	三八・五	九・八
六、獨居者	四・二	一・八	一・〇	三・五	五・二	一・四
七、仕事の手傳をなす家族	二・六	一・六	七・七	三・七	一〇・三	七・〇
八、無職乃至不明なる者	四・五	二・二	一・九	一・五	六・四	三・七
其の中不勞働收入生活者	九・三	四・二	二・五	一・三	一一・八	五・五
没落階級	〇・九	〇・七	六・〇	五・七	六・九	六・四
九、失業業者	二九・四	一五・三	四・七	二・八	三四・一	一八・一
一〇、其他者	二五・〇	一三・三	二七・三	二・一	五二・三	三三・四

全東部シベリア住民の半数以上(五五・五%)は獨立生計者であるが、これは勞働力の極めて大なる事を示すものと認めねばならぬ。而してこれはソ聯邦全體及び諸外國の獨立生計者率と比較すれば殊に明瞭となるであらう。即ち、

東部シベリア	五五・五	オーストラリア	四二・四
佛蘭西	五五・九	ベルギー	四三・三
伊太利	四七・六	ソウエート聯邦	五八・六
ラトビヤ	六〇・九	アメリカ合衆國	三九・四
獨逸	五七・四	ブリガリア	五三・七
英國	四五・五		

東部シベリアの獨立生計者率は英國、伊太利、ベルギー及び米國よりは遙かに上位にあるが、ソ聯邦全體よりは下位にある。

東部シベリアに於ては農村住民は都市住民より大なる獨立生計者率を有するが、こゝには幾分か上述せる如き獨立生計者なる概念の曖昧さが見られる。即ち農業に従事する成年家族は本質的には彼等がその家長の仕事に参加する程度と参加の性質の如何に拘らず、すべて獨立生計者の範疇に包括されてゐるが故に、かかる大なる農村人口の獨立生計者率も嚴密なる意味の獨立生計者を表示するものではない。

東部シベリアの都市人口の内、獨立生計者は四二・八%を占め、ソウエート聯邦の都市平均(四二・二%)よりも稍々高く、露西亞共和國(四一・四%)、後高加索共和國(三四・七%)よりも高いが、ウクライナ共和國の平均(四

五・九%)よりは低い。

労働者中の獨立生計者率(四〇・二%)は勤務員のそれ(三九・九%)と殆んど等しいが、都市労働者の獨立生計者率(三一・九%)は都市勤務員のそれ(三八・八%)よりも著しく低い。最も獨立生計者率の小さいのは鐵道労働者で、僅かに二五・三%、建築労働者は三二%であつて最も大きいのは農業労働者の六一・九%である。

諸種の人口集團中に於ける獨立生計者の比率に對應してこれ等集團中には被扶養者率、即ち獨立生計者一人に對する非獨立生計者數も増加する。

東部シベリアの被扶養者率 (獨立生計者一人に對する非獨立生計者數)

人口集團	都市人口	農村人口	總人口
總人口	一・三	〇・七	〇・八
内 職 業 者			
一、勞 働 者	二・二	一・一	一・五
二、勤 務 員	一・六	一・三	一・五
三、自 由 職 業 者	一・四	一・七	一・六
四、雇傭労働者を有する營業主	二・〇	二・〇	二・〇
五、雇傭労働者を有せざる營業主	一・九	二・一	二・一
六、獨 居 者	二・〇	一・八	一・八

七、職業不明又は無職者 其中不勞働收入生活者	〇・六	〇・三	〇・五
没 落 階 級	一・三	〇・九	一・二
八、失 業 者	〇・三	〇・〇	〇・一
九、其 他 者	〇・九	〇・七	〇・九

非獨立生計者による負擔は東部シベリアでは極めて低く、平均一人にも足らず、僅かに〇・五人であり、農村地方では〇・七人にしかならない。都市に於ては労働者に最も多く二・二人、不労働者集團(雇傭労働者を有する營業主)二・〇人である。農村地方に於ては農業(國營、共營農業)に従事する者に最も被扶養者率高く二・一人、村落に於ける自營業者部門に於ては二・〇%である。

前述の如く獨立生計者なる概念に包括される人口にも社會的に差異があり、従つて獨立生計者の社會的構成を示す事は重大且つ必要な事である。尙、之が構成の實數は前掲の表により明らかであるが、獨立生計者の各種社會的集團の總數に對する比率を示せば次の如くである。

一九二六年度人口調査に依る獨立生計者構成 (百分比)

人口集團	都市人口	農村人口	總人口
全獨立生計者數	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇

東部シベリアの人口問題

内 譯		内		内	
一、勞 働 者	二二・九	一〇・三	五・四	七・八	
二、勤 務 員	二五・八		一・七	五・〇	
三、自 由 職 業 者	〇・四		〇・一	〇・一	
四、雇傭労働者を有する營業者	〇・六		一・五	一・四	
五、雇傭労働者を有せざる營業者	五・〇		二五・三	二二・五	
六、獨 居 者	七・五		三・二	三・八	
七、仕事手傳の家族	五・八		六一・二	五三・六	
八、職業不明又は無職者	一三・七		一・二	二・九	
九、失 業 者	七・七		〇・一	〇・四	
一〇、其 他 者	〇・四		〇・五	〇・四	
没 落 階 級			〇・二	〇・四	
其 他			〇・二	一・六	

六四

都市に於ける獨立生計者の内、プロレタリアートは過半数——五六・四%を占め、その中二二・九%は労働者、二五・八%は勤務員、一〇・三%（釋註、七・七%の誤りならん）は失業者である。農村に於てはプロレタリアートは七・三%、全人口中に於ては一四・一%を占めてゐる。残りの獨立生計者はプロレタリアートにあらざる他の労働者に屬する。人口調査に用ひられる名稱に従へば恐らく不労働者に入れらるべき住民及び雇傭労働者を有する營業主

没落階級及び不労働者は全獨立生計者中僅かの比率しか有しない。即ち都市では三・一%、農村地方では更に少くして二・一%、東部シベリア全體としては二・二%である。

都市並びに農村に於ける其の他の非プロレタリア的労働者の内、農村に於ては雇傭労働者を有せざる營業主及び仕事の手傳ひを爲す家族が大なる比率を有し、都市に於ては家内工業者、手工業者が大なる比率を有してゐる。東部シベリアの獨立生計者の社會的構成は以上の如くである。之を構成する人口集團の内、今後の研究に當つて大なる興味を提供するものは次の二集團——プロレタリアート（労働者、勤務員、失業者）及び不労働分子、就中雇傭労働者を有する營業主である。之等の集團が如何なる獨立生計者なるかにつき尙よく研究して見よう。先づプロレタリアートに就いて就中労働者及び勤務員、即ちプロレタリアートの活動的部分について見よう。労働者及び勤務員の國民經濟の各部門に於ける分布及び兩者の比率は次の表の示す通りである。

一九二六年度人口調査に依る東部シベリアの國民經濟部門別プロレタリアート分布表（單位千人）

産 業 部 門	勞働者及び勤務員		内 勞働者		内 勤務員		プロレタリア部門中の比率
	實 數	百分比	實 數	百分比	實 數	百分比	
全 産 業	一八五・三	100・0	一一一・八	100・0	七三・四	100・0	—
内 譯							

第五章 人口の社會的構成

六五

没落民。之等集團の大きさは上掲の表により明らかである。即ち都市に於ては不勞所得による生活者が優越し、農村地方に於ては雇傭労働者を有する營業主及び没落分子が多い。東部シベリア全體に於て不勞働者の主要部分を構成する者は雇傭労働者を有する營業主で、三二、〇〇〇人の不勞働者中二〇、二〇〇人を占めてゐる。

之等三つの不勞働者の集團の總數は非獨立生計者を合して七八、八〇〇人で、その中一五、三〇〇人は都市に、六三、四〇〇人は農村に存在した。

實際上は不勞働民の集團はもつと多いのであるが、その一部分は恐らく人口調査の際、雇傭労働者を有せざる營業主、獨居者、仕事の手傳を爲す家族、職業不明者、時にはプロレタリア的人口集團にさへ混入せられたのであらう。尙、雇傭労働者を有する營業主の國民經濟部門に於ける分布は不勞働者の職業を特徴づけてゐるから、次に示さう。

國民經濟部門別による雇傭労働者を有する自立的營業主(註)の分布(一九二六年度人口調査)

産業部門	雇傭労働者使用營業主		内		市		農村地方	
	實數	百分比	實數	百分比	實數	百分比	實數	百分比
全産業業………	二〇、三三二	一〇〇・〇	一、六七六	一〇〇・〇	一八、五四五	一〇〇・〇	一、六六七	一〇〇・〇
農	一八、一五八	八九・八	三、一三三	一八・七	一七、八四五	九六・二	一、〇二二	五・八

産業部門	雇傭労働者使用營業主		内		市		農村地方	
	實數	百分比	實數	百分比	實數	百分比	實數	百分比
工場工業	七五	〇・四	二八	一・七	四七	〇・三	一、一八〇	六・〇
家内手工業	一、一八〇	六・〇	六八三	四〇・七	四九七	二・七	四、四五	〇・二
建築業	四五	〇・二	一一	〇・六	三四	〇・二	三三	〇・二
運輸業	一三一	〇・六	九二	五・五	三九	〇・二	三九	〇・二
商業	六二四	三・〇	五四六	三三・六	七八	〇・四	五	〇・〇
その他の部門	八	〇・〇	三	〇・二	五	〇・〇	八	〇・〇

(註) 自立的營業主とは獨立生計者であり、且つ營業主である者を指す。

都市に於ては家内手工業(四〇・七%)及び商業(三三・六%)が優勢し、都市タイプの村落に集中しつゝある農業ブルジョアも多い(二八・七%)。農村地方に於ける殆んど凡てのブルジョアは農業ブルジョア(九六・二%)で、商業ブルジョアは全部で二・七%である。東部シベリア全體としては農業ブルジョアが優越し(八九・八%)、實數一八、〇〇〇人以上に達し、非獨立生計者を合算すれば富農部分は全不勞働民七八、六五七人の中五三、四六五人を算する。一九二六年以降六年間には東部シベリアに於ける國民經濟の著しい發達及び此の發達の社會主義的特質によつて都市並びに農村に於ける社會的人口構成は著しく變化せしめられた。

此の變化は要するにプロレタリアート(特に國民經濟中の生産部門に於ける)の著しい増加と、失業者一掃、不勞働者集團の殆んど完全なる掃蕩及びホルホーズ員をして東部シベリア農業の基本たらしめた事等に據るものである。プロレタリアートの増加は工業、運輸業、林業の著しい發展、東部シベリアに於ける大建設の開始、ソフホーズ

東部シベリアの人口問題

の形成及び其の増大等を基礎として起つたものであり、同時に教育、保健及び其の他の奉仕的國民經濟部門に従事する労働者の増加によつてもプロレタリアート数は増大した。プロレタリアートの増大と共に其の内部的構成も變化した。プロレタリアート蒙古自治共和國を除ける東部シベリアの總プロレタリアート数は次表の如くである。

東部シベリアのプロレタリアート増加 (單位千人)

産業部門	一九二七年	一九二九年	一九三〇年	一九三一年	増加百分比
全産業	一四四・九	一五八・一	一八九・一	二七七・一	一九一・二
内産					
一、工	二五・三	二九・七	三九・六	六七・三	二六六・〇
(a) 規格工業	二〇・七	二四・四	三五・八	五八・四	二八二・二
(b) 非規格工業	四・六	五・三	三・八	八・九	一九三・五
二、建	一・三	四・五	七・九	二五・六	一九六九・三
三、運	三二・六	三六・七	四五・三	五一・八	一五九・〇
其中	二八・五	三三・三	三九・五	四三・二	一五二・六
鐵道					
水	三・六	三・九	四・一	四・三	一九・五
地方交通機關	〇・五	〇・五	一・七	四・三	八六〇・〇
四、通信事務労働組合	一・七	二・一	二・八	四・五	二六五・〇
五、商	一〇・九	一一・〇	一三・七	一七・〇	一五六・〇

産業部門	一九二七年	一九二九年	一九三〇年	一九三一年	増加百分比
六、社會	一・一	一・二	一・六	五・一	四六四・〇
七、金	一・五	一・五	一・四	二・四	一六〇・〇
八、教	一一・四	一三・四	一五・二	一八・五	一六二・三
九、保	四・五	五・三	七・四	一一・三	二五一・二
一〇、獸	〇・一	〇・二	〇・二	〇・三	三〇〇・〇
一一、官	一六・〇	一八・二	二〇・〇	二二・七	一三五・七
一二、家	一・三	一・二	〇・六	〇・八	六二・〇
庭労働者					
日備労働者	六・〇	五・〇	四・五	四・〇	六六・八
一三、日					
備労働者	三〇・五	三三・八	二七・七	四五・〇	一四七・六
一四、農					
林		二・八	七・五	一七・六	
其の中、ソフホーズ及び農業企業					
機械トラクター配給所					
一五、其	〇・六	〇・八	〇・九	一・四	二三四・〇

五ヶ年間にプロレタリアートの總数は殆んど二倍になり、一九二七年の一四四、四〇〇人から一九三一年の二七七、二〇〇人に、即ち一九二・二%に増大した(註)。東部シベリアに於けるプロレタリアート数の増大はソ聯邦全體に於けるよりも極めて迅速であつた。即ち、ソ聯に於ては一九二五・二六年より一九三一年初までに一六〇%に増大したのである。其の後の各年度は一層大なる増加テンポを示して居る。

(註) 一九三二—三三年のアロレタリアートの増加に關してはア・チュラーエフ著「一九三二年度の東部シベリアに於ける労働パランス」及び雜誌「東部シベリアの社會主義經濟」一九三二年第一號を参照す。

前述の如く、東部シベリアの人口は最近に於ては左程著しい社會的增加を持たず、従つて右に述べた如きプロレタリアートの増大は主として同地方内の労働資源の増加に依つてもたらされたものである。而もこれは住民を著しく活動化せしめ、其の一般の社會的構成を急激に變化せしめつゝ、労働資源のより完全なる利用を惹起した。

東部シベリアの労働資源の活用は非獨立生計者を生産労働に引入れる前に失業者の完全なる掃蕩を導いた。而してこの失業者の掃蕩は開始されたる東部シベリア工業化の社會主義的特質及び共營化による農業の社會主義的改善の基礎に立つて行はれた。

斯くて一九三〇年には東部シベリアの職業紹介所に失業者が現はれなくなり、職業紹介所そのものがソ聯全體に於けると同様東部シベリアに於ても閉鎖されるに至つた。

然し、實際上失業者の掃蕩されたのはそれよりも遙か以前の事である。職業紹介所が虚偽的失業者で充満されてゐる以上、紹介所の計數上の失業者を以て失業者の存在と看做す事は出来ない。この間の消息は労働需要と労働供給との相關々係によつて理解しうる。此の相關々係の分析は失業者が實際的には紹介所閉鎖より遙か以前に掃蕩された事を示してゐる。これは東部シベリアの凡ての職業職紹介所に共通な狀況を反映してゐる舊クラスノヤルスク職業紹介所の資料により明らかである。(七三頁の表参照)

一九二八年には既にクラスノヤルスク市に於ては労働需要が著しく労働供給を超過した。即ち、供給一〇、四一〇件に對して需要は二一、三八八件、換言すれば就職希望者一人に對し二つの席が空いてゐた事になる。其の後に於ては職業紹介所が需要を満足し得ないために紹介所を通じての労働需要は著しく減少せるにも拘らず、同様の相關々係が持續されてゐる。一例を挙げれば、クラスノヤルスク職業紹介所から毎求人申込百人に對して送られた人員は一九二八年度——八一人、一九二九年度——九二人、一九三〇年度——九四人であつた。

東部シベリアに於ける失業者の大部分は舊管區の首都——イルクーツク、カンスク及びクラスノヤルスクに集中されてゐた。

クラスノヤルスク市に於ける労働供給關係

月	名	労働供給			労働需要		
		一九二八年	一九二九年	一九三〇年	一九二八年	一九二九年	一九三〇年
一	月	八四八	七〇四	一、〇五九	八四六	一、〇〇七	二、三四八
二	月	六四六	六〇三	一、〇六〇	九四三	一、二六七	一、九九六
三	月	八三三	一、二九七	一、二四七	一、四〇〇	一、五七三	二、一七五
四	月	八〇七	一、三二八	一、三八五	一、五六〇	二、二二五	一、六八六
五	月	七五七	一、三九八	一、四九四	二、四六七	二、八八七	二、四二一
六	月	八七五	一、一六四	一、一五三	一、九八九	二、五七八	二、三〇〇

は同期間に變化なきも、東部シベリアに於ては二倍以上に増大した。
 女子の生産への参加と同時に男子の参加も惹起された。其の上奨學金を得て獨立生計者となつた學生の數も著しく増加した。尙、給費學生の増加は學生數の増加並びに奨學金増加によるものである。
 これ等の事はすべて非獨立生計者の活動化、獨立生計者の比率増大、勤勞民中に於ける被扶養者の減少を導き、一九三一年に行はれた都市人口の統計と一九二六年の人口調査資料とを比較對照すれば、東部シベリアの都市人口に關するかゝる經過を知る事が出来る。

東部シベリアの獨立生計者一人に對する非獨立生計者數

産業部門	勞働者		勤務員	
	一九二六年	一九三一年	一九二六年	一九三一年
全産業	二・二	一・四	一・六	一・三
規格工業	二・〇	一・二	二・一	一・四
家内手工業	一・三	一・三	一・四	〇・九
建築業	二・三	四・一	二・一	一・四
鐵道運輸業	二・八	一・九	二・三	一・七
商業及び金融	二・〇	一・三	一・九	一・三

被扶養者の特に著しい減少は勞働者に於て見られる。即ち、被扶養者率は二・二人から一・四人に減少したが、勞

働者の中でも最も大なる減少を示せるものは建築業に於てであつて、二・三人から一・一人に減少した。鐵道従業員には従來通り被扶養者が多い。即ち、鐵道勞働者には一・七人、鐵道勤務員には一・九人である。勤務員は一九二六年に於ては勞働者よりも被扶養者が少かつた爲に、一九三一年初に於ては少い被扶養者の減少——一・六人より一・三人へ——を示してゐる。

一九三一年度に於ては既に全都市に於て被扶養者は一・一人（一九二六年の一・三人に對して）に、特にイルクーツク市に於ては〇・八七人にまで減少した。

被扶養者の減少は住民の益々活動しつゝある事及び勞働力の強化のみを示すものではなく、更に勞働者の家計が、以前に獨立収入源を有せざりし家族の newly 生産に参加して得た賃銀によつて、充された事を立證するものである。因みに、一九三一年の統計資料によつて都市の非獨立生計者の性別並びに年齢別人口構成を分析するならば、未だ生産勞働に参加せざる勞働資源を明らかにする事が出来るであらう。

全都市の非獨立生計者人口 其中 自十六歳—至五九歳 勞働年齢人員百分比	男子		女子	
	子	女	子	女
	九八、三九七	二二二、一一〇	一〇四、三五九	三三〇、五〇七
	八、三六四	一〇四、三五九	四九・二	一一二、七二九
	八・五	四九・二		三六・三

十万人以上の女子及び八千人以上の男子——東部シベリアの都市だけでさへ此の如く未だ利用されない労働資源がある。獨立して生計を營まざる全女子の殆んど半分乃至全非獨立生計者の三分の一以上が労働能力を有し、イルクーツク市に於いては此の比率は尙若干高い。

即ち、男子非獨立生計者の九・三四%、女子の五〇・〇八%、男女總數の三七・二九%が一六歳乃至五九歳に相當する。尙、獨立生計者率はイルクーツク市が最も多く、獨立生計者一人に對して非獨立生計者〇・八七人であるが、他の都市では非獨立生計者一・二〇人に相當してゐる。

都市八口の計算は一九三一年の初に爲された。その時以來——一九三一年に於ても、又一九三二年に於ても非獨立生計者の生産への参加が相次いで行はれ、勤勞民中の被扶養者數は之によつて益々減少された。

東部シベリアの社會主義的工業化及び都市並びに農村に於ける資本主義の殘壘に對する不斷の全面的攻撃は人口の階級的構成を著しく變化せしめた。

國民經濟の社會化部門は經濟的支配權を集中せるのみならず、資本主義をその全陣營から叩き出した。「誰が誰に勝るか」の問題は都市に於てのみならず農村に於ても社會主義に有利に解決された。經濟的據點を奪はれた搾取階級は狂人の如く自滅に反抗しつゝとん底を歩み、階級的警戒の強北を必要なるものとして、絶えずこの反抗を強めつゝある。

東部シベリアの都市人口に於ける階級的變化は一九二六年の人口調査及び一九三一年の都市人口調査の比較對照

によつて明瞭に示されてゐる。

東部シベリア都市人口の社會的構成の變化 (△印は減少)

社會的集團別	各集團の人口 (單位千人)		増減 (絕對數)	各集團比率	
	一九二六年	一九三一年		一九二六年	一九三一年
總人口.....	四六〇・九	五八五・一	一二四・二	一〇〇・〇	一〇〇・〇
其中獨立生計者	一九七・五	二七四・六	七七・一	一〇〇・〇	一〇〇・〇
一、プロレタリアート	三〇五・六	四九六・五	一九〇・九	六六・三	八四・八
其中獨立生計者	一一一・七	二二五・六	一一三・九	五六・六	八二・二
(a) 勞働者	一四一・一	二五二・四	一一一・三	三〇・六	四三・一
其中獨立生計者	四五・一	一九三・七	五八・六	二二・八	三七・八
(b) 勤務員	一三一・三	八七・七	三六・八	二五・八	三三・〇
其中獨立生計者	五〇・九	四六・六	一四・三	一六・四	八・〇
二、獨立製造業者	七五・七	一八・四	一四・三	一六・五	六・七
其中獨立生計者	三二・七	七・六	一七・八	五・五	一・三
三、ブルジョア	二五・四	三・九	六・三	五・二	一・四
其中獨立生計者	一〇・二	三・九	六・三	五・二	一・四
四、其他	五四・二	三三・五	一九・七	一一・八	五・九
其中の獨立生計者	四二・九	二六・七	一六・二	二一・七	九・七

全都市の獨立生計者数は七七、一〇〇人だけ増加してゐるのに對し、獨立生計者中のプロレタリアート部分は更に多く、労働者の増加により一一三、九〇〇人だけ増加して居り、其の内自活労働者数は五八、六〇〇人だけ増加した。一方非プロレタリアート集團の人口は増加しなかつたのみでなく、却つて著しく減少し、獨立製造業者（産業組合に加入せる者及び然らざる者を含む）は一四、三〇〇人、アルシヤは六、三〇〇人だけ減少した。

全都市の獨立生計者中、プロレタリアートの比率は一九二七年の五六・六%から一九三一年の八二・二%に増大した。而して、労働者は二二・八%から三七・八%に、勤務員は二五・八%から三二・〇%に増大した。

東部シベリア地方の最も大なる個々の都市の「社會的」人口構成は同地方の全都市の平均と若干の差異を示してゐるが、甚しい隔りは見受けられない。

一九三一年度東部シベリア各都市人口の階級的構成

都市名及び住民の分類	全人口	百分比				協同製造業者、手工業者、家族	獨立製造業者及手工業者、家族	ブルジョア及手工業者、家族	その他
		プロレタリアート	その他のプロレタリア	計	ブルジョア				
イルクーツク	100.0	33.01	35.06	77.97	8.04	2.29	1.61	1.00	10.01
獨立生計者	100.0	41.04	33.00	77.84	8.93	3.22	2.76	1.30	2.00
非獨立生計者	100.0	35.66	37.70	73.36	6.71	3.00	2.33	1.35	6.63
全人口	100.0	33.01	35.06	77.97	8.04	2.29	1.61	1.00	10.01

カンスク	獨立生計者	非獨立生計者	全人口	クラスノヤルスク	獨立生計者	非獨立生計者	全人口	チタ	獨立生計者	非獨立生計者	全人口	ウルフネ・ウヂンスク	獨立生計者	非獨立生計者	全人口
23.01	23.01	23.01	23.01	23.01	23.01	23.01	23.01	23.01	23.01	23.01	23.01	23.01	23.01	23.01	23.01
35.06	35.06	35.06	35.06	35.06	35.06	35.06	35.06	35.06	35.06	35.06	35.06	35.06	35.06	35.06	35.06
77.97	77.97	77.97	77.97	77.97	77.97	77.97	77.97	77.97	77.97	77.97	77.97	77.97	77.97	77.97	77.97
8.04	8.04	8.04	8.04	8.04	8.04	8.04	8.04	8.04	8.04	8.04	8.04	8.04	8.04	8.04	8.04
2.29	2.29	2.29	2.29	2.29	2.29	2.29	2.29	2.29	2.29	2.29	2.29	2.29	2.29	2.29	2.29
1.61	1.61	1.61	1.61	1.61	1.61	1.61	1.61	1.61	1.61	1.61	1.61	1.61	1.61	1.61	1.61
1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00
10.01	10.01	10.01	10.01	10.01	10.01	10.01	10.01	10.01	10.01	10.01	10.01	10.01	10.01	10.01	10.01

獨立生計者中に於けるプロレタリアートの比率の最大なるものはクラスノヤルスク市の八五・一六%で、イルクーツク市は八四・五%、最も小さいのはウルフネ・ウヂンスク市の六八・二%であるが、同市に於ては其他の人口

の比率が非常に大きく二二・六七%を占めてゐる。イルクーツク市に於ては労働者の比重は比較的低く、三二・〇一%であるが、クラスノヤルスク市に於ては最も高く四三・八三%である。尙、勤務員の比率の最も高いのは東部シベリアの行政的、経済的中心地たるイルクーツク市で、三五・〇六%を占めてゐる。

東部シベリアの工業の發達と其の發達の社會主義的特質とは諸都市を有望なるプロレタリア獨裁の基礎と化せしめ、其の人口の極めて大部分をプロレタリアートが優占する事によつて文字通りプロレタリア都市と爲した。

農村人口の社會的構成も亦同期間内にソウヴェート農村に起つた巨大なる進歩によつて變化せしめられた。而して、その原因は貧・中農大衆のコレホーズへの流動、農業生産の協同化と工業化及び此の基礎に立つて開始された、階級としての富農の撲滅並びにソフホーズの素晴らしい發展等にある。

就中、農業の社會主義的部門の勝利は農業プロレタリアートの内部的構成を著しく變化せしめた。我々は農村人口に關する人口調査資料を有しないが、これ等の變化によつて農村地方に於ける凡ての住民中に發生せる社會的進歩を判斷する事を得るであらう。

農業プロレタリアートの構成

全農業プロレタリアート	一九二九年	一九三〇年	一九三一年	増加百分比	比	
	一九二九年	一九三一年	一九三一年		一九二九年	一九三一年
三〇、五六二	二四、二二五	二五、七五七	八四・三	一〇〇・〇	一〇〇・〇	

内 譯	一九二九年	一九三〇年	一九三一年	増加百分比	比	
	一九二九年	一九三一年	一九三一年		一九二九年	一九三一年
ソフホーズ及農業企業	二、七五五	七、四六五	一七、六三二	六四〇・〇	九・〇	六八・四
機械トラクター配給所	—	—	二六二	—	—	一・二
コレホーズ	二四〇	四七二	一、八五二	七七一・七	〇・八	七・二
個人農業及農業組合	二七、五六七	一六、二八九	六、〇二二	二二・八	九〇・二	一三・二

特に興味深いのは農業の個人的部門に従事せる雇傭労働者の著しい減少で、雇傭労働者は一九二九年の二七、五六七人に比し、一九三一年には既に僅か六、〇二二人しか働いて居らず、而も此の大部分は農村組合に働くものである。

ソフホーズの發展は富農より脱出せる日傭農夫及び其の他の多數の農民をその組織内に引き入れ、其の結果個人的部門に於ては著しくプロレタリアート数が激減し、一方プロレタリアートの總数は近年益々増加しつつある。而してその質に於ては一九二九年頃までのそれと著しく異り、一九三一年には殆んど全農業プロレタリアートが社會主義的農業部門——ソフホーズ、機械トラクター配給所、乾草刈取機配給所——に従事してゐる。

農民の階級的構成は次の表に見る如き毎年行はれる租税調査によつて知る事が出来る。

東部シベリア農村人口の階級的構成（一九三一年度租税調査資料）

實 數	乳 兒 を 除 く 全 人 口		個 人 經 營	
	總 數	コルホーズ、ソフホー、トラクタ官配給所	租税免除者	一般租税負擔者
乳兒を除く全人口に對する百分比	二、四三・二	四・三	二五・〇	七五・四
乳兒を除く全個人經營人口に對する百分比	二〇〇・〇	四〇・一	二〇・七	三・四
		一・七	三・二	三・七
			八・九	四・五
			一・二	〇・六
			五・一	二・六
			二〇	五・八
				七・四

乳兒を除く全人口の殆んど半分はコルホーズ内に存在する。農村のブルジョアは著しく減少した。一九二六年の人口調査によれば、東部シベリアの農村地方に於いて農業に従事する雇傭労働者使用の營業主のみは非獨立生計者（乳兒を除く）を合せて五二、五七七人であつた。一九三一年度に特別税を課せられた者は僅かに富農家族一二、七〇〇人で、これは乳兒を除く全人口の〇・五%より若干多いに過ぎない。

富農階級の掃蕩開始及び此の結果たる農村ブルジョアの著しい減少と並んで、農村人口の社會的構成に大なる進歩を示すところのものは、コルホーズに編入された人口數の連年の増加である。

實に此のコルホーズ員の増大及びコルホーズ員をして農村經濟の中心たらしめた事は、東部シベリアの農村並びに全ソヴェート聯邦に於ける社會的進歩の中でも重要な政治的成功と云はねばならぬ。

益々激化する階級闘争の中にあつて資本階級は建設過程にある社會主義の爲に決定的に打ちのめされ、どん底を歩んでゐる。が一方ソ聯に於ては住民の生活力は増大しつゝあり、彼等はその益々大なるエネルギーを一般的生产に投じてゐる。勤勞者軍は愈々擴大され、特にプロレタリアート數は急速に増加しつゝある。これが即ち最近に於ける進歩である。而して、人口の社會的構成に於ける右の如き進歩は第二次五ヶ年計畫期に完成されるであらう。

「第二次五ヶ年計畫の主要なる政治的課題は資本主義分子及び階級の全般的且つ徹底的撲滅、階級的差別及び搾取を惹起すべき諸原因の完全なる排除、經濟上に於ける、又人々の意識中に存する資本主義的陋習の克服及び國內の全勤勞民をして無階級的社會主義社會の意識的及び實行的建設者たらしめる事である」。此の第十七回全ソ聯邦共産黨大會の歴史的決議は近い將來無階級的社會の成員たるべき住民の社會的構成の方向と進歩の壯大さとを明確に決定せるものである。

第六章 年齢別及び性別人口構成

年齢別人口構成は重大なる意義を有する。其の第一の理由は、それが或る地方並びに一國全体の労働資源を決定する點にあり、第二は、年齢別構成が人口の自然的増加——出生死亡の差増に極めて重大なる影響を有する點にある。

此の如く年齢別構成は重大なる意義を有するものであるが、個々の地方の年齢別構成は社會的經濟的要因に依存し、自然的要因よりも遙かに大なる程度に於て之によつて決定されるものである。

年齢別人口構成、特に小兒及び老人階級の比率は出生率及び死亡率の水準に關係を持ち、出生率及び死亡率は社會的經濟的並びに階級的構成と不可分の關係にある。特に社會狀態の影響は國內の個々の地方乃至住民集積地點の人口の年齢別構成に強く影響する。一例を挙げれば、都市人口と農村人口との年齢別構成は異り、又出稼人の流入する地方と流出する地方とに於ては個々の年齢階級の比率は全く異なる。即ち前者に於ては労働年齢人口の比率が著しく大きく、小兒群の比率が小であるが、後者に於ては之と反對である。

住民の年齢別構成は唯人口調査によつてのみ決定されるものにして、人口調査の行はれない年度間に平均命数を參考として爲される年齢別構成の概算は必然的に不正確であり、従つて條件的なものである。人口調査の資料すら年齢に關する部分に於ては明らかに甚しい修正を要するのである（一例を挙げれば五未滿を切上げて五となし、一〇

未滿を切上げて一〇となせる如き計算の結果は之を排除せねばならぬ）。是の故に、東部シベリア人口の年齢別構成を決定するには一九二六年の人口調査によるの他はない。

東部シベリア人口の年齢別構成（總計に對する百分比）

年齢別	都市人口	農村人口	全東部シベリア	年齢別	都市人口	農村人口	全東部シベリア
一 未滿	二・八	四・〇	三・八	二五—二九	九・〇	七・五	七・七
一	二・三	三・二	三・一	二九—三〇	六・八	六・五	五・六
二	二・四	三・一	三・〇	三五—三九	六・八	五・八	五・九
三	二・三	三・一	三・〇	四〇—四四	五・七	四・四	四・七
四	二・〇	二・八	二・六	四五—四九	四・八	四・三	四・四
〇—四	一一・八	一六・二	一五・五	五〇—五四	三・四	三・二	三・三
五—九	九・一	一二・二	一一・六	五五—五九	二・六	三・〇	三・〇
一〇—一四	一〇・五	一二・〇	一一・六	六〇以上	二・六	三・〇	三・〇
一五—一九	一一・四	一一・二	一一・三	全年齡階級	四・九	六・八	六・五
二〇—二四	一三・〇	八・〇	八・八	一六—五九	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇

此の表中に於て最も注目すべきは、農村人口の大なる比率が東部シベリア人口の年齢別構成に與へる影響である。即ち都市並びに農村に於ける各年齢別に見た人口の比率に於て東部シベリア全人口の年齢別構成は著しく農村人口

のそれに接近してゐる。農村地方から都市への人口流入、特に労働年齢人口が多数流入せる結果、農村人口中の労働年齢人口の比率は都市よりも小なる事が判る。即ち都市に於ては六一・三%、農村地方では之より著しく低く、五〇・五%である。

小年数の比率は、右に述べた如き現象並びに農村の出生率の高い結果、都市よりも農村人口に於ける方が高い。尙、農村人口が都市人口に比して凌駕せるのは十七歳までの住民数であり、十七才に至るまでは何れの年齢に於ても例外なしに優越してゐるが、十七歳に近づくに従つて兩者の差は漸次減少してゐる。此の事實は一層農村の出生率の増大せる事を物語つてゐる。十七歳の年齢群の比率は都市も農村も同様(二・二%)であるが、其の上になると四十八歳に至るまで例外無しに都市人口が凌駕し、それ以後になると再び農村人口が大なる比率を占めて來る。年齢別構成は亦性別構成にも依存して變化する。但し都市と農村とは夫々異つた變化をもつてゐる。

一九二六年度の人口調査による人口の性別及び年齢別構成 (總計に對する百分比)

年齢別	東部		シベリア		全人口	
	都市人口	農村人口	都市人口	農村人口	男子	女子
一 未滿	二・八	二・八	四・〇	四・〇	三・八	三・八
二	二・三	二・三	三・一	三・一	三・一	三・一
三	二・〇	二・〇	二・七	二・七	二・七	二・七
四	二・〇	二・〇	二・八	二・八	二・七	二・七
五	九・〇	九・二	一・六	一・六	一・五	一・五
六	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
七	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
八	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
九	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
一〇	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
一一	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
一二	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
一三	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
一四	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
一五	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
一六	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
一七	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
一八	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
一九	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
二〇	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
二一	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
二二	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
二三	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
二四	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
二五	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
二六	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
二七	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
二八	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
二九	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
三〇	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
三一	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
三二	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
三三	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
三四	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
三五	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
三六	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
三七	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
三八	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
三九	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
四〇	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
四一	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
四二	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
四三	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
四四	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
四五	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
四六	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
四七	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
四八	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
四九	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
五〇	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
五一	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
五二	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
五三	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
五四	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
五五	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
五六	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
五七	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
五八	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
五九	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
六〇	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・三
六〇以上	四・三	五・七	七・〇	六・七	六・五	六・五
總計	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇
一六—五九	六二・八	六〇・二	五〇・三	五〇・六	五一・八	五一・三

東部シベリア全人口の内年齢別構成は、性別に見れば多少の變化を有し、男子に於ては勞働年齢期にある人口數——特に高年齢者の——が極めて少く、只女子數を若干凌駕してゐるに過ぎない。尙、東部シベリアに於てはソ聯邦全人口中に見るが如き世界大戰による成年以上の男子の減少の結果、勞働年齢男子の比率が女子よりも小さくなつたと云ふ現象は見られない。かゝる極めて興味ある情勢はソ聯邦領域に於ける男子の減少が戦後の人口再分布の結果地域的に不均等に發生したことを證明してゐる。

乍然、總體的に都市人口に於ては、女子數に比して勞働年齢男子數多く、農村人口に於ては反對の現象が見られる。即ち、勞働年齢女子數は勞働年齢男子數よりも幾分多い。前者は勞働年齢男子人口の著しい都市流入の結果であり、後者は右の人口流入が東部シベリア農村地方の犠牲によつたものであるけれども、それは部分的で、極めて低い程度のものに過ぎなかつたことを示してゐる。何故かなれば勞働年齢女子數は男子數を極めて僅少にしか凌駕してゐないからである。

人口の年齢別構成は種々の事情によつて變化する。例へば戦争、飢饉、革命等々の如き國民經濟が經驗せる變動の影響により、或は全社會機構を震動せしむる如き事件の結果等々により變化するのである。之は東部シベリア人口の年齢別構成動態の上に明らかに看る事が出来る。

一八九七年及び一九二六年に於ける東部シベリア人口の年齢別構成（全人口に對する百分比）

	〇—九	一〇—一九	二〇—二九	三〇—三九	四〇—四九	五〇—五九	六〇—六九	七〇以上	二〇—五九
一八九七年度	二五・三	一九・五	一五・〇	二二・九	二〇・八	七・九	五・二	三・五	四六・六
エニセイスク縣									
ザバイカル縣	二六・六	二〇・八	一六・五	二二・二	九・九	七・二	四・二	二・七	四八・八
イルクーツク縣	二四・八	一九・六	一六・五	二三・三	二〇・七	七・七	四・七	二・七	四八・三
一九二六年度	二七・二	三三・九	一六・五	二一・五	九・二	六・三	—	—	四三・四
東部シベリア									

ソウニート政權時代に移つて以來、主として死亡率減少による人口の自然的増加率が上昇せる結果、一九二六年度には一八九七年度よりも小兒群及び青年群の比率が増加し（之等の小兒及び青年階級は既に十月革命後に生れ、且つ成長せるものである）、之と同時に二〇歳——五九歳、即ち最も働き盛りの年齢の人口比率が著しく低下した。尙、一九二六年の人口調査以後に於ける東部シベリア全人口の年齢別構成の變化については同期間内に人口調査が行はれてゐないため判断する事が出来ないが、都市人口のみの年齢別構成の變化は一九三一年に行はれた都市人口概算によつて研究する事が出来る。

都市に於ける勞働年齢人口の比率は一九二六年の六一・三%から一九三二年の初めには六三・三六%に増加した。其の内勞働年齢人口は特に著しく、六二・八%から六五・六%に増大し、イルクーツク市の勞働年齢人口の比率は六七・六八%で、其の内男子人口中にしては六九・二%にさへ達してゐる。更に個々の年齢群別による比率を比較し

て見ると、一九三一年度に於ては一九二六年度に比して小兒群（〇—二歳）の比率が著しく低下し、それより稍々高い年齢（三—七歳）にある兒童の比率は反對に増大してゐる。次いで労働年齢人口の比率は増大し、男子は一五歳—五九歳の人口比率は増加し、六〇歳以上の人口のみが低下を示してゐる。女子人口に就いて見ると、其の労働能力ある全女子の比率は少しく増大してゐるが、これは一部の労働能力ある女子の増加によつて生ぜるもので、一五歳—一九歳、四〇歳—四九歳の年齢群の比率は低下してゐる。

その後の各年度に於ける都市人口の年齢別構成は、農村地方からの人口流入並びに出生率の低下等の結果、必然的に労働年齢人口の比率増大を招來した。農村人口の年齢別構成も亦變化した。然しより正確に之を判断する事は人口調査後でなければ不可能であらう。

一九三一年度及び一九二六年度東部シベリア都市人口の年齢別構成

年齢別	一九三一年度都市人口概算						一九二六年度人口調査度	
	イルクーツク市		其の他の諸都市		全都市人口		男	女
〇—二	四・六一	四・三三	四・六一	六・五八	七・三二	六・三三	七・四	七・五
三	二・三	二・四	二・三八	二・七	二・四	二・三	二・三	二・三
四—六	六・四	六・〇	六・七六	六・九	七・四九	六・八	五・七	五・八

年齢別	一九三一年度都市人口概算						一九二六年度人口調査度	
	イルクーツク市		其の他の諸都市		全都市人口		男	女
七	一・六	一・九二	一・四	二・二	二・三	二・〇六	一・八	一・八
八—一〇	四・六	四・八	四・八	五・〇	六・四	五・〇九	五・三	五・三
一一	一・六	一・四九	一・六	一・〇	一・〇	一・七	一・七	一・八
一二—一四	三・九	四・三	四・一	四・五	五・三	四・九	六・六	七・一
一五—一九	一・〇	一・六七	二・二	二・〇	二・二	二・〇	二・〇	二・一
二〇—三九	四・〇	三・八	三・八	三・七	三・七	三・九	三・七	三・六
四〇—四九	二・〇	二・〇	二・〇	二・〇	二・〇	二・〇	二・〇	二・〇
五〇—五九	六・九	七・四	七・一	六・七	六・七	六・六	六・〇	六・〇
六〇以上	四・二	六・四	五・六	四・九	五・六	四・九	四・三	四・九
一六—五九	六・九	六・六	六・六	六・六	六・六	六・六	六・七	六・七
總計	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇

人口の性別構成即ち人口を男子と女子とに區別する事も亦東部シベリアの人口に關する研究上興味深い事である。性別構成は年齢別構成よりは不變的であるが、尙、時間的に或は地域的に變化する。例へば歐羅巴に於ては男子一、〇〇〇人に對して女子一、〇二四人、亞米利加では女子九七三人、亞細亞では九五八人、濠洲八五二人、阿弗利加九六八人、而して地球全體の平均は女子九八八人である。

ソ聯邦に於ては女子人口は男子よりも多く、男子一、〇〇〇人に對し一八九七年度一、〇一七人、一九二六年度

一、〇七〇人となり、男子人口を凌駕するに至つた。
東部シベリア人口の性別構成及び其の變化は次の表により明らかである。(百分比)

年次	都		市		農		村		合		計
	男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計		
一九二二	五三・六	四六・四	一〇〇・〇	五一・四	四八・六	一〇〇・〇	五一・七	四八・三	一〇〇・〇		
一九二六	五一・〇	四九・〇	一〇〇・〇	五〇・二	四九・八	一〇〇・〇	五〇・三	四九・七	一〇〇・〇		

東部シベリア全體或は都市及び農村に於ても男子の比率が減退し、女子の比率が増大してゐる。一九二二年に於ては男子一、〇〇〇人に對し女子九三二人であつたが、一九二六年には既に女子九八七人に増加した。特に都市に於て男子人口の比率の著しい減退を見た。即ち男子一、〇〇〇人に對し以前は女子八六四人であつたものが、一九二六年には既に女子九六〇人に上昇した。農村に於ては右の關係は女子九四六人より九九三人に増大した。

尙、一九三一年度の都市人口概算は都市人口中に於ける男子比率の一層の減退を示してゐる。即ち、一九二六年の五一・〇%から一九三一年には五〇・七%に下り、女子比率は此の期間に於て四九・〇%から四九・三%に上昇した。性別構成は年齢によつて變化する。而して労働年齢人口の性別構成は特に重要であり、一九二六年の人口調査によれば、東部シベリアの労働年齢人口の性別構成は次の如くである。(百分比)

總人口	男子		女子		計
	子	子	子	子	
總人口	五〇・五	四九・五	四九・九	一〇〇・〇	
都市人口	五二・二	四八・八	四九・九	一〇〇・〇	
農村人口	五〇・一	四九・九	四九・九	一〇〇・〇	

労働年齢人口数の内男子数は多く五〇・五%を占めてゐるが、これは主として都市に負ふもので、都市の労働年齢人口の五二・二%は男子である。

第七章 プリヤート蒙古自治共和國

プリヤート蒙古自治共和國は獨立せる行政單位として、東部シベリア地方に包括され、プリヤート人をその基本的民族とする。

同共和國の東部シベリアのみならず全ソ聯邦に對して有する經濟的、政治的重要性は同共和國の根本的人口問題の個別的糺明を必要ならしめてゐる。

プリヤート蒙古自治共和國の總人口數の動態は次表の如くである。

總人口	人口調査				一九三一年一月一日現在人口算定		一九二〇年一月一日現在の人口比率	
	一九二六年	一九二八年	一九二九年	一九三〇年	一九三一年	一九二〇年	一九二六年	一九三〇年
内譯								
都市人口	三三三・〇	四五・九	四八・〇	五〇・三	五二・七	六〇・五	一八三・四	一三一・九
同百分比	六・九	八・八	九・〇	九・二	九・四	一〇・四	一一・一	一一・四
農村人口	四四八・八	四七八・二	四八七・四	四九六・九	五〇六・五	五二二・三	一一六・三	一〇九・二
同百分比	九三・一	九二・二	九一・八	九〇・八	九〇・六	八九・六	一一・一	一一・一
總人口	四八一・八	五二四・一	五三五・四	五四七・二	五五九・二	五八二・五	二二〇・九	二二〇・九
同百分比	九三・一	九二・二	九一・八	九〇・八	九〇・六	八九・六	一一・一	一一・一

プリヤート蒙古自治共和國に於ける都市人口は農村人口に比して急速に増加し、その結果、最近十年間に都市人口比率は著しく増大し、六・九%から一〇・四%になつたが、未だ東部シベリアの平均水準までには到達してゐない。プリヤート蒙古自治共和國の都市人口は同國工業化の開始と關聯して最近特に激増し、一九二六年から一九三一年までに三一・九%、年平均六%の増加を示し、一九三〇年の一ケ年のみで一四・九%の増大を見てゐる。プリヤート蒙古自治共和國の總人口の増加と共に共和國內に住むプリヤート人の人口數も亦増大した。

年	一九二六年	一九二八年	一九二九年	一九三〇年	一九三一年	一九三一年對一九二六年百分比	年平均増加率
總人口	二二五、九二六	二二八、〇六六	二二〇、三二五	二二二、四二二	二二四、六二五	一〇四・〇	〇・八

プリヤート人の年増加數の少いのはプリヤート人の自然的増加が比較的小さい事及び共和國外への人口の移動によるものであり、一九二六年の人口調査によれば同共和國外に存在するプリヤート人の數は二一、三八〇人であつた。プリヤート蒙古自治共和國人口の社會的構成は一九二六年の人口調査資料によつて示す事が出来る。而して右人口調査のプリヤート蒙古共和國に關して爲された結果はテ・ズヴルコウイ氏によつて雜誌「プリヤート蒙古自治共和國の生活」の一九二八年一―三號誌上に發表された論文「プリヤート蒙古自治共和國人口の獨立生計者率及び主要なる職業の狀況並びに勞働諸部門に就いて」中に述べられてゐる。

一九二六年度人口調査のプリヤート蒙古自治共和國人口の社會的構成に關する主要なる數字は次表に示す如くである。

人種別並に 都鄙別人口	獨立生 計者率	全活動的獨立生計者中に於て占むる割合 (百分比)						總計
		労働者	勤務員	自由職業者	雇傭労働者 を使用せざる 營業主	雇傭労働者 を使用せざる 營業主	個人經營 農民	
全 人 口	六〇・八	三・九	三・一	〇・二	二・一	二七・〇	四・二	五九・六
内 譯								
露西亞人其他	五四・二	六・五	五・八	〇・二	一・五	二四・八	四・九	五六・四
ブリヤート人	六八・七	一・二	〇・五	〇・一	二・七	二九・一	三・五	六九・九
都 市 人 口	四九・四	二二・一	三九・一	〇・七	二・〇	九・七	一四・七	一〇・七
内 譯								
露西亞人其他	四七・六	二二・六	三九・一	〇・七	一・九	九・一	一四・八	一〇・八
ブリヤート人	七六・八	一〇・八	四一・七	〇・三	三・〇	二四・四	一〇・六	九・二
農 村 人 口	六二・〇	二・九	一・四	〇・二	二・一	二七・八	三・六	六二・二
内 譯								
露西亞人其他	五五・四	四・八	二・五	〇・一	一・四	二六・四	三・九	六〇・九
ブリヤート人	六八・六	一・二	〇・四	〇・一	二・七	二九・一	三・四	六三・一

ブリヤート蒙古自治共和國人口の獨立生計者率、特にブリヤート人の獨立生計者率は極めて高く、東部シベリアの平均(五五・五)及び全ソ聯邦の平均(五八・六)よりも高い。之は主として仕事の手傳を爲す家族によつて獨立生計者率を高められてゐるところの農民數が壓倒的多数を占めてゐるからである。即ち、農村人口がブリヤート人の

獨立生計者率をして露西亞人よりも高からしめてゐるのである。

活動的獨立生計者ブリヤート人は主として農業に従事して居り、これは彼等の中の雇傭労働者を使用せざる營業主及び仕事の手傳を爲す家族の比率を大ならしめてゐる。ブリヤート人中に於ては一九二六年には労働者の比率が極めて低く、露西亞人のそれよりも著しく低かつたが、一方に於てはブルヂヤ(雇傭労働者使用營業主)の比率も露西亞人よりも多かつた。

一九二六年以後は主としてプロレタリアートの激増、ブリヤート人の生産への参加及び貧・中農のホルホーズ化によつてブリヤート蒙古自治共和國人口の社會的構成が著しく變化した。

都市人口(本質的にはウルフネウチンスク市人口のみの)の社會的構成の變化は前に述べた如くであるが、一方ブリヤート蒙古自治共和國の農村人口の變化は次のホルホーズに加入せる住民の増加によつて充分證明される。

- 一九二八年.....一・〇%
- 一九二九年.....四・二%
- 一九三〇年.....一四・九%
- 一九三一年.....五〇・四%

即ち、ブリヤート蒙古自治共和國を除ける東部シベリアのホルホーズ員の比率が全農民の四一・七%、東部シベリア全體としては四三・七%であつた時、ブリヤート蒙古農民の半分は既にホルホーズ員であつたのである。

一九三一年の租稅調査の資料によれば、ブリヤート蒙古自治共和國の農村人口の階級的構成は次の如くである。

乳児を除く全人口に對する百分比……… 乳児を除く個人經營農民人口に對する百分比	乳 兒 を 除 く 全 人 口		個 人 經 營		
	總 數	コルホーズ	ソフホーズ 機械トラクタ 所、官廳	租稅免除者 一般租稅 負擔者 農産物販賣 收入に基く 租稅負擔者	特別稅 負擔者 無收入者 個人經營 合計
一〇〇・〇	一	五〇・四	〇・三	一六・八	二・二
一	一	一	一	一六・八	二・二
				二八・七	二・二
				五八・三	四・二
				四・二	一・七
				〇・八	〇・九
				〇・九	四九・三
				二・〇	二〇〇・〇

個人的理由に基いて單一農業税を課せられたる富農階級は全農業の〇・八%、個人農の一・七%を占め、全農業の〇・五%、個人農の〇・九%に相當する富農を有する東部シベリア（ブリアート蒙古を除く）よりは稍々比率が高い。農村人口の社會的構成の進歩を示すものに亦個人的農業部門に於ける雇傭労働者の減少がある。（家内工業労働者を除く）。

年 次	定 期 勞 働 者		個人經營農民中に於ける日 傭労働者
	總 數	其中、耕作其の他に從事 する農業労働者	
一九二八年	六・七	四・八	一〇〇
一九二九年	五・五	三・八	一〇〇
一九三〇年	二・四	一・二	七〇

農業の集團化及び此の基礎に立つて展開せる階級としての富農の撲滅はブリアート農村の人口構成を著しく變化せしめた。即ちコルホーズ員が中心勢力となり、個人部門に於ける雇傭労働が縮小され、それと同時に人による人の搾取も減少され且つ次第に消滅しつつある。尙、ブリアート蒙古自治共和國人口の自然的動態を同國內に居住する基本的なる二民族——ブリアート人及び露西亞人——特に基本住民たるブリアート蒙古人に就いて研究する事は興味あるものであるから、二、三ブリアート蒙古人に就いて述べて見よう。

ブリアート人の自然的増加問題は文献の上に於ても色々と糾明されてゐるが、其中でも我々が盛んに利用したエム・カ・ハラヒーノフ氏著「ブリアート蒙古自治共和國の人口動態」は最も興味あるものである。（註）

（註） 第一回極東地方學術研究大會に於けるエム・カ・ハラヒーノフ氏の報告書「ブリアート蒙古自治共和國人口動態」による。

一九二六年の人口調査以前に於けるブリアート人の自然的増加はエス・バトカノフ氏（十九世紀）の資料により、或は一八九七年及び一九二六年の人口調査に基きブリアート人々口を比較對照する事によつて明らかにされ得る。バトカノフ氏はイルクーツク縣及びバイカル州に於ける一八一七年より一八九七年に至るブリアート人の増加を年平均一〇・六%と決定し、バラガンスキイ・ブリアート人、ウエルホレンスキイ・ブリアート人及びイルクーツキイ・ブリアート人に關しては彼は人口一、〇〇〇人當り一八三九年——一八五九年の年平均増加率を三・二五人、一八五九年——一八九七年一・一五人、一八八九年——一八九七年一・九二人と決定してゐる。その内、ウエルホレンスキイ・ブリアート人は一八五九年——一八九七年には一、〇〇〇人當り二・〇人の減少を示した。其の後のブリアー

ト人の自然的増加は次表の如くである。(△印は減少を示す)

ブリヤート種族	人口調査に依る人口		三〇年間の増減 總對數
	一八九七年	一九二六年	
クヂンスキイ、ウエルホレンスキイ、及 オルヒンスキイ、ブリヤート人………	三六、六三八	二八、五〇三	△ 八、一三五
バラガンスキイ及ニジネウヂンスキイ	四七、三四四	四一、七三三	△ 五、六一一
トンキンスキイブリヤート人	一一、八九九	一四、〇〇〇	一、一〇一
バルグヂンスキイ	一一、四五九	一四、三六五	二、八九六
アギンスキイ	三九、〇八三	三六、三三七	△ 二、七四六
バルグヂンスキイ、及アギンスキイ、ブ リヤート人を除く、全東部ブリヤート人……	一一六、三〇四	一〇一、八六六	△ 一四、四三八
總計	二六三、七二七	二三六、七九四	△ 二六、九三三

三〇年間にはブリヤート人の数は二六、九三三人だけ減少した。特に西部ブリヤート人の人口数は著しく減少し、東部ブリヤート人以上に減少し、唯トンキンスキイ・ブリヤート及びバルグヂンスキイ・ブリヤート人のみが増加してゐる。

右の如く十九世紀に於てはブリヤート蒙古人は極めて低い増加を示したが、個々のブリヤート種族の中には減少さへ示したこともある。十九世紀の終り及び二十世紀の初めに於てはブリヤート人口の自然的動態は益々悪化し、個々

の種族だけでなく、全ブリヤート民族が減少するに至つた。尤も其の人口變動に大なる役割を演じてゐるのは住民の移住であつて、住民は蒙古のアガンスキイ部^{アガ}及び其の他の部へ或は、特に最近に於ては其の他の東部シベリア諸地方へ移住しつゝある。之と同時にブリヤート族の独立性喪失も亦右の人口動態に影響を與へてゐる。

乍然、之等の諸原因ありとは云へ、ブリヤート人の減少は主として人口の自然的減少に依るものなる事を認めねばならぬ。

人口の自然的減少は帝政時代にブリヤート人を抱括せる社會的、經濟的、文化的乃至生活的條件の結果であつて、明らかに、強固な排外的愛國主義の現れであるとする、反革命的性質を有するところのブリヤート民族「自滅」乃至「退化」の説は不當である。之等の學説は先づ自然的減少の實際原因を研究する事により、又ソウエート政權時代に入つて減少が増加に變つた事によつて完全に打破されうる。最近の状態は殊に明瞭に人口の自然的動態が社會的、經濟的要因に依存するものなる事を證明してゐる。

ブリヤート人口の自然的減少の原因を探究するに當つて、ハラヒーノフ氏はその論文中に於て次の結論を下してゐる。即ち「ブリヤート民族の芳しからざる増加状態は小兒及び大人の死亡率の高き事、女子の妊孕率が若干低下せる事及び之等の過程によつて惹起されたるブリヤート住民の人口學的特殊性によるものである」と。

ブリヤート人の自然的減少に影響を與へたるものは充つ第一にその女子人口の年齢別構成であつて、これは露西亞人のそれとは著しく異つてゐる。

四 五—四 九	五・四二	一〇・七	五・〇	五・五七	一〇・八
---------	------	------	-----	------	------

ブリヤート婦人、特にトッキンスキイ・ブリヤート婦人の妊孕率は他の民族よりも低く、主として最も多産的年齢に属する婦人に於て低い。ハラヒーノフ氏の引用せる露西亞婦人及びブリヤート婦人の妊孕率も亦ブリヤート婦人の妊孕率の低さを語つてゐる。ブリヤート人の一般的妊孕率(妊娠可能期にある婦人一、〇〇〇人當り出産数)は一〇〇、露西亞人は殆んど其の二倍で一九二であるが、かゝる関係は婚姻者の妊孕率(妊娠可能期にある有配偶婦人一、〇〇〇人當り出産数)に於ても亦見られる。即ちブリヤート婦人の一五六に對し露西亞人二八一である。

ブリヤート婦人の妊孕率低下の原因は何處に存するか。それは勿論十月革命前のブリヤート人の環境に存する。既にエス・バトカーノフ氏はシベリアの土着民の増加は社會的經濟的の制度に依存するものなる事を指摘し、且つ、ブリヤート人に關しては、彼等が定住及び農業に移行せるにも拘らず、尙、出産率小を續けてゐた事を述べてゐる。乍ら、如何なる具體的な社會生活上の事實がブリヤート婦人の出産力に影響してゐるか云ふ問題は今後の研究を俟たねば解決されえない。

ハラヒーノフ氏は此の問題に就いて、ブリヤート婦人の出産力低下の原因たり得る次の如き要因を指摘してゐる。即ち、其の一は困難なる生活並びに衛生條件に基く淋疾及び女子生殖器病の蔓延である。此の結果ブリヤート婦人中には妊娠不能者数が極めて多く、例へばトッキンスキイ・ブリヤート人の有配偶婦人の八%は結婚後四ヶ年以上

に互る不妊者である。其の二は婦人の内分泌組織に影響を及ぼす栄養分の質的及び量的不足である。ブリヤート人の栄養不足は偏食(主として肉食)により倍加され、ビタミンE——妊娠ビタミン——を含むと想像されてゐる穀物、野菜の不攝取に原因してゐる。

ソウエト政権時代になつて以來ブリヤート人口の自然的動態は改善せられ、減少から逐年増加に移行した。この事は一九二四年——一九二九年間に於けるブリヤート蒙古自治共和國內に居住するブリヤート人に關する資料によつて明らかである。

自一九二四年至一九二九年ブリヤート人口の自然的動態 (千人當り)

年次	ブリヤート蒙古	出生率	死亡率	増加
一九二四	ブリヤート蒙古自治共和農村地方	一六七	一一・八	三・九
一九二五	ブリヤート蒙古自治共和農村地方	一六七	一一・八	三・九
一九二六	ブリヤート蒙古自治共和農村地方	二〇・九	一六・七	三・七
一九二七	ブリヤート蒙古自治共和農村地方	二五・二	一七・〇	四・二
一九二八	ブリヤート蒙古自治共和農村地方	二五・三	一七・〇	八・二
一九二九	ブリヤート蒙古自治共和農村地方	二二・七	一三・三	八・三
一九三〇	ブリヤート蒙古自治共和農村地方	二二・七	一三・三	九・四
一九三一	ブリヤート蒙古自治共和農村地方	二二・七	一三・三	九・四

東部シベリアの人口問題

一九二八	ブリヤート共和自治國	二四・一	一九二九	ブリヤート共和自治國	二四・一
一九二九	農村地方	二四・一	一九三〇	農村地方	二四・一
	農村地方	三二・八			
					二〇・八

ブリヤート人の自然的増加は六年間に四倍以上に達し、一九二四年度の人口一、〇〇〇人當り三・九人より一九二九年度の一七・三人に上昇した。此の増加は若干の死亡増加があつたにも拘らずもたらされたものである。即ち、同期間内に出生数は二倍に増加してゐるのである。

以上の資料はブリヤート人自滅の断定を否定して居る。事實ブリヤート人は現在其の生活能力を發揮し、ソウェート政權の民族政策の影響を受けて比較的急速に其の人口を増大しつつある。帝露西亞の壓迫の下に於ては、ブリヤート人は實際死滅しつつあつた。然るにソ聯邦治下のブリヤート人は營に自然的減少（現今先進文明諸國の凡てが有する）を脱出せるのみならず、著しい自然的増加をさへもたらすに充分な生活能力を自己の中に發見しつつある。

ブリヤート住民の經濟的、日常生活の乃至衛生的諸條件を著しく改善せんとするブリヤート蒙古自治共和國産業發展計畫の實現は、人口の自然的増加を益々高めるに役立つであらう。ブリヤート蒙古自治共和國の國家計畫委員會の計算によれば、ブリヤート人口の自然的動態は次の如くなる豫定である。（千人當り）

出生數	一九三三年	一九三四年	一九三五年	一九三六年	一九三七年
死亡數	二九・〇	三〇・〇	三一・〇	三二・〇	三三・〇
自然的増加	一四・〇	一四・〇	一三・〇	一二・〇	一一・〇
	一五・〇	一六・〇	一八・〇	二〇・〇	二二・〇

過去五ヶ年間にブリヤート蒙古自治共和國の人口は主として自然的増加に依つて増大した。（左表参照）

ブリヤート蒙古自治共和國人口増加原因（單位千人、△印は減少を示す）

都市人口	自然的増加	一九二七年	自然的増加	一九二八年	自然的増加	一九二九年
		一九二七年		一九二八年		一九二九年
農村人口	社會的増加	一九二七年	社會的増加	一九二八年	社會的増加	一九二九年
		一九二七年		一九二八年		一九二九年
合計	計	一九二七年	計	一九二八年	計	一九二九年
		一九二七年		一九二八年		一九二九年

都市人口 農村人口 合計	一九三〇年			一九三一年			五個年總計		
	自然的 增加	社會的 增加	計	自然的 增加	社會的 增加	計	自然的 增加	社會的 增加	計
〇・四	七・四	七・八	〇・四	八・四	八・八	二・九	二〇・五	二三・四	
一一・二	三・三	一五・五	一一・二	七・八	四・四	五六・二	△八・四	四八・二	
一一・六	一〇・七	二二・三	一一・六	〇・六	一三・二	五九・五	一一・一	七一・六	

譯註 右の數字中には明らかなる誤りあるも原文のまま譯載す

ブリヤート蒙古自治共和國人口の總增加數七二、六〇〇人の内、國外からの流入人口は全部で僅か一二、一〇〇人であるが、自然的増加數は五九、五〇〇人を占めてゐる。尙、農村及び都市の人口増加の性質はそれ／＼異り、都市は主として社會的増加（二三、四〇〇人のうち二〇、五〇〇人）によるもので、自然的増加は二、九〇〇人に過ぎないが、農村地方に於ては狀勢は全く反對である。農村人口は四八、二〇〇人も増加したけれども、其の自然的増加の大部分を都市に與へた。勿論、此の期間内には農村地方へ流入せる者もあるが、流入人口は流出口より遙かに少いものであつた。（完）

露文 翻譯
ソ聯極東及外蒙調查資料既近刊目錄

第一編	ソ聯極東地方要覽	菊判	二六二頁
第二編	ソ聯極東の運輸交通問題	同	二三八頁
第三編	モスコウ—イルクツク航空路の氣象	同	一八一頁
第四編	南ザバイカルの地形と土壤（上卷）	同	三四一頁
第四編	南ザバイカルの地形と土壤（下卷）	同	二四七頁
第五編	シベリア經濟地理（上卷）	同	二六五頁
第五編	シベリア經濟地理（下卷）	同	二九六頁
第六編	蘇城・オリガ聯合企業	同	三二二頁
第七編	ソ聯極東地方の自然地理及礦物資源に關する新資料	同	三一頁
第八編	東部シベリアの自然地理及礦物資源に關する新資料	同	二一八頁
第九編	ソ聯極東及東部シベリアの自然資源と其利用に關する新資料（上卷）	同	二〇七頁
第九編	ソ聯極東及東部シベリアの自然資源と其利用に關する新資料（下卷）	同	二八二頁
第十編	ビロビヂャン（猶太人自治州）要覽	同	一一〇頁

露文翻譯ソ聯極東及外蒙調查資料既近刊目錄

露文翻譯ソ聯極東及外蒙調査資料既刊目錄

第十一編	ブリヤート蒙古自治共和國現勢	同	菊判	三〇三頁
第十二編	外蒙調査資料 第一輯	同	同	二〇二頁
第十二編	外蒙調査資料 第二輯	同	同	一八四頁
第十三編	ソ聯極東地方人種誌	同	同	二五〇頁
第十四編	永久凍土層の研究	同	同	一一二頁
第十五編	東部シベリア地方經濟要覽	同	同	三五三頁
第十六編	外蒙古の食肉資源	同	同	九九頁
第十七編	東部シベリア地方の有色金屬鑛床	同	同	一五一頁
第十八編	外蒙古地誌(上卷)	同	同	二六四頁
第十八編	外蒙古地誌(下卷)	同	同	一七二頁
第十九編	新疆よりゴビ沙漠を横ぎる	同	同	一一四頁
第二十編	シベリアの炭田	同	同	二五八頁
第二十一編	北地航空路の研究(上卷)	同	同	二一九頁
第二十一編	北地航空路の研究(下卷)	同	同	二六四頁
第二十二編	ソ聯極東の森林	同	同	四二三頁
第二十三編	西部蒙古族及び滿洲族(上卷)	同	同	三四一頁
第二十三編	西部蒙古族及び滿洲族(下卷)	同	同	二六〇頁

第二十四編	アムグン・ブレヤ四河河孟調査資料 第一輯	同	菊判	一四六頁
第二十四編	ウダ・セレムジ四河河孟調査資料 第二輯	同	同	二〇六頁
第二十四編	アムグン・ブレヤ四河河孟調査資料 第三輯	同	同	一四八頁
第二十四編	ウダ・セレムジ四河河孟調査資料 第四輯	同	同	一四〇頁
第二十四編	アムグン・ブレヤ四河河孟調査資料 第五輯	同	同	一二八頁
第二十五編	アムール・ヤクーツク幹線道路の水上滲出水	同	同	二五〇頁
第二十五編附録	一九二七—二八年冬季に於けるアムール・ヤクーツク幹線道路の水上滲出水圖面集	同	同	四六倍判 三六頁
第二十六編	全蘇聯鐵道輸送統計	同	菊判	一六七頁
第二十七編	ソ聯極東の水産及畜産	同	同	二六七頁
第二十八編	カザクスタン諸州概観	同	同	一一九頁
第二十九編	南ヤクーツク部氣候・地形・土壤・植物誌	同	同	二四六頁
第三十編	全ソ聯鐵道貨物移動統計	同	同	二二二頁
第三十一編	東部シベリア地方自然地理概観	同	同	二七〇頁
第三十二編	ソ聯極東地域に於ける新建築材料	同	同	一一六頁

露文翻譯ソ聯極東及外蒙調査資料既刊目錄

露文翻譯ソ聯極東及外蒙調査資料既近刊目錄

- 第三十三編 ソ聯極東の産金地(上卷)
- 第三十三編 ソ聯極東の産金地(下卷)
- 第三十四編 ソ領亞細亞動力資源調査書 第一輯
- 第三十四編 ソ領亞細亞動力資源調査書 第二輯
- 第三十四編 ソ領亞細亞動力資源調査書 第三輯
- 第三十四編 ソ領亞細亞動力資源調査書 第四輯
- 第三十四編 ソ領亞細亞動力資源調査書 第五輯
- 第三十五編 東部シベリアの人口問題

四

菊判 二八七頁
 同 三三三頁
 近刊
 菊判 二八八頁
 同 二三五頁
 同 二〇〇頁
 同 三三四頁
 同 一一〇頁

昭和十一年十一月五日印刷
 昭和十一年十一月十日發行

譯文
 ソ聯極東及外蒙調査資料 第卅五編

東部シベリアの人口問題

大連市伏見町一四番地

著作人 中 島 宗 一

大連市近江町九一番地

印刷人 山 田 浩 通

大連市近江町九一番地

印刷所 東亞印刷株式會社

大連市東公園町三〇番地

發行所 南滿洲鐵道株式會社

終

